
シークレットゲーム ~ lost lifeline ~

list

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットゲーム } l o s t l i f e l i n e }

【Nコード】

N35270

【作者名】

l i s t

【あらすじ】

シークレットゲーム、キラークイーンの二次創作です。

総一と咲美はオリキャラにチェンジ。

それ以外のキャラは原作通りです。

ルール等は、多少の変更点があったりしますが基本的には原作通りです。

四話と五話と一話にまとめました。
それ以外にも一部、加筆・修正しました

第一話 l o s t l i f e l i n e (前書き)

原作と異なる点

- ・総一と咲美がオリキャラにチェンジ
- ・PDAに記載されているルール3の書き方が原作と異なる（ルール3の内容自体は変わっていない）
- ・ルール4に追加内容がある
- ・原作には登場しなかったソフトウェアがある…かもしれません

誤字脱字が目立ったり、スペースの取り方で見にくかったりするかもしれませんが、気付いたことがあればどうぞご指摘下さい。

また、文章力が未熟で目に余るかとは思いますがご容赦下さい。

第一話 l o s t l i f e l i n e

少年、相川幸貴^{あいかわこうき}が意識を取り戻し、最初に目にしたのは灰色の壁だった。

自分の部屋ではない、まずそう思った。

仰向けに寝ていた体を起こすと、ここが見知らぬ一室だということが分かった。

自身が寝かされていたベッドも初めて見る物だ。

ベッドから体を出し、立ち上がり、全体を見回す。

相川は部屋を見回すまでは、病院にでも運び込まれたのかと考えていたが（運ばれるような心当たりも無かったが）、すぐにそれが間違いだと気づくことになった。

部屋の広さは十畳程度で、部屋自体は灰色のコンクリートに囲まれていて窓一つ無い。

蛍光灯のおかげで暗くは無いが、部屋全体が淀みのある光で包まれているような印象を受ける。

部屋にあるものと言えば、相川が先程まで寝ていたベッドと、簡素なデスクくらいで極端に殺風景だ。

こんな部屋が病室であるはずも無い。

そもそも、相川にはここが何の為の部屋なのかも想像出来ない。

また、自分がこの部屋いる経緯も理由も理解出来ないでいた。

そもそも、どうして意識を失っていたのだろうか？

混乱しかけている頭に鞭を打ち、状況を整理する。

目を覚ます前の記憶は学校からの帰り道で途切れている。

こんな訳の分からない所に向かう予定なんて無かったし、寄り道せずに家に帰っている筈だった。

なのに知らない間に意識を失っていて、気付けば……………この部屋だ。

ということは、自分の意思でここに来たのではなく、学校から家へ向かう途中で何者かにここに連れて来られたのだろう、相川はそう判断した。

この、病院でもなければ自宅でも無い、不気味な一室に。

そう考えた時、相川は初めて自分が置かれている状況が決して樂觀出来るものでないと悟った。

「誘拐」……………。

理由や目的は分からないがそう判断すべきだ。

しかし、そうは言っても実感が湧かない。

危機感もやって来ない。

相川にとって誘拐なんてものは自分とは一切関わりない、別の次元で起こるような出来事の筈だった。

それが急に自分の身に降りかかりました、などと言われても、まるで現実味が感じられない。

だが、今の状況を考えればその別次元の出来事の渦中に放り込まれたと判断するしかない。

現状を正しく認識しなくては正しい行動はとれない。

自分ハ…………ユウカイ…………された。

自分は…誘拐…………されたのだ。

そう無理にでも自身に言い聞かせるとようやく少しばかりの現実感と危機感が沸いてきた。

これでいい。

こうでもして、危機感と現実感を持たなければならない。

さて、これからどうすれば、と思索していると部屋の隅のデスクの上にある見慣れたスクールバッグが目にとまった。

デスクに近づき、バッグ中身を確かめると、それが確かに自分の物であることが分かった。

中身は、記憶が途切れる寸前の物と一切変わっていない。

つまり、相川をここに連れて来た人間はご丁寧に荷物をそのままの状態で相川の寝ている部屋に持ってきたことになる。

妙に親切だ、そう思わざるを得なかった。

普通の誘拐ならこんなことはしないだろう。

相川は、益々自分の置かれている状況が掴めなくなっていた。

とりあえず、バッグを担ごうとデスク上から持ち上げると、バッグの陰に隠れていた財布と携帯電話に気付いた。

どちらもここに来る前には制服のポケットに入っていた筈の物だ。

携帯電話こそ、圏外で通信を行えない状況だったが、財布の方はスクールバッグと同様に中身には手出しされていなかった。

親切過ぎる、と相川は内心で苦笑した。

相川は財布と携帯電話をズボンのポケットに入れ、バッグを肩に掛け、軽く部屋を見て回る。

大した広さもない部屋なのですぐに調べ終えた。

どうやら先ほど見つけた荷物以外には特に何も無いようだ。

これ以上この部屋に居ても仕方ないと判断し、唯一の出入口であるドアに向かった。

普通に考えれば外から施錠されている。

何せ、相川は誘拐されてここに居る筈なのだから。

だが、万が一ということもある。

相川は薄い望みだとは分かりつつもドアノブに手をかけようとする。

しかし、手がドアノブに触れる前にドアノブが急に回転し、扉は相川の向こう側へと吸い込まれた。

ドアが開いたのだ。

ドアの向こうに立っていたのは学生服を着た少女だった。

相川と目が合う。

少女の体は170cmの相川よりは一回り小さく、痩せている訳でも太っている訳でもなく、女性にしてはやや短めの黒い髪。

大きく開かれた瞳が印象的なその顔は、相川が中学生だった当時に毎日のように見ていた物だった。

少女がそのドアを開けるとそこに居たのは一人の少年だった。

紺色のブレザーを着ていて、一目で学生だと分かった。

身長は156cmの彼女より頭一つ高く、男性にしては
やや長めに切り揃えられた黒髪。

スツキリとした輪郭に目鼻立ちの整ったその顔には見覚えがあった。

少女は相川を見ると、キョトンとした表情を浮かべたまま、口を開いた。

「あれ、幸貴くん!？」

「な、中瀬さん!？」

相川は困惑した。

ドアが開いたこと自体、予想外だった。

それに加えてまさかこの場で見知った人間と出会うなんてこと夢にも思わなかったのだ。

そんな相川とは対照的に『中瀬』と呼ばれた少女の表情は一気に明るくなった。

「やっぱり幸貴くんだー、どうしてここに!？」

中瀬は跳び跳ねるように相川に近づき、出会った直後は3mほどあった二人の距離は1m弱までに縮まった。

「いや、俺は気づいたらここに……」

「私も何だか知らない内に連れて来られたみたいなんだ」

「中瀬さんも同じ……か」

「同じと言えばさ、幸貴くんも首輪着けてるんだね」

「首輪って？」

「え？ 幸貴くんも巻いてるじゃん、銀の首輪」

相川は中瀬が何を言っているか分からなかったが、自分の首に手をあてると確かに自分の首に金属製の物が巻き付いているのが分かった。

言われるまで全く気付かなかったが一度気付くと、むしろ何故今まで気付かなかったのかが不思議に思えた。

見れば、中瀬の首輪にも銀色の首輪が巻かれている。

おそらく相川の首輪と同じ物だろう。

首輪は首のサイズに完全に合わせてある上に、金属製であるため、力尽くで外すのは厳しそうだった。

「確かに、二人とも首輪が付けられてるけど、これって何の為に…」
何の為に、という疑問を挙げればキリが無い状況ではあったが、相川はこの首輪の存在に特に嫌な感じがしていた。

「何の為かは私もよく分かんない。何の為なんだろうね、この首輪も、建物も」

「とりあえず、この部屋から出よう。ここに居ても仕方ないしさ。俺には中瀬さんの言う『建物』もよく分からない」

「そうだね、まずは探索だよな」

二人は部屋を出ることにした。

部屋を出ると、そこも灰色の壁に囲まれた空間だった。

人が五、六人横に並んで歩けるくらいの通路が続いている。

「中瀬さんはどの道を使って来た？」

「えーと、確かあっちからかな」

やや自信無さそうに「あっち」とされる方を指差した。

「あっちには何かあった？」

「基本的には何にも無かったよ。たまに部屋があったけど、中には特に何かある訳でもなかったし」

「じゃあ、こっちに行こう」

相川は言いながら中瀬の差した方とは反対方向に歩を進めた。

中瀬もそれに続く。

しかし二、三步進んだ所で相川が急に足を止めた。

「どうかした？」

中瀬が当然の疑問を口にする。

「いや、ちよつとさ」

相川は振り返りながら返事をして、肩から下げているバッグから一枚のルーズリーフとセロハンテープを取り出した。

そのルーズリーフを手で小さく切り分け、テープでその破片の一つを先ほどまで居た部屋の扉に張り付けた。

「何してるの？」

「いや、目印にと思って。何せこの迷路みたいな建物を地図無しで移動する訳だから」

「そうだね、そうでもないか迷っちゃうよね」

「じゃあ、行こうか」

二人は再び歩き始めた。

相川達は歩き始めて5分と経たない内に二つの人の姿を見つけた。

一人は男性、もう一人は女性だろう。

相川達とは50m以上の距離がある。

向こうもこっちに気付いたらしく、こちらに向かって歩いて来る。

「どうする？」

言われると中瀬はその場で立ち止まり考え込んだ。

それに合わせるように相川も歩くのを止めた。

「うーん、ここで幸貴くん以外の人と合うのは初めてだから何とも言えないけど。でも誰かと話さなきゃ進まないし、私は話してみたいな」

「分かった、そうしよう」

元々、相川自身もそのつもりだったし、彼女がそう答えるのにも察しがついていた。

わざわざ訊いたのは確認の為だ。

一応、あちらの二人が相川や中瀬を誘拐した人間である可能性もある。

しかし、中瀬が違った以上そうでない可能性も同じくらい有るだろう。

たとえあの二人が誘拐犯だったとしても、相川達をここまで自由にさせてきた人間だ。

今さらになって急に危害を加えてくるとは思えなかった。

ならば話してみるのが得策というものだろう。

相川達も向こうの二人に向かって歩き、互いの距離が声の届くぐらいに近づくと、向こうの二人は歩くのを止め、男性の方が声を張って呼び掛けてきた。

「こちらは争う気は無い。出来れば話し合いをしたいんだが」

相川がそれに応じる前に、「こつちもです！」

と、中瀬が手を大袈裟に振りながら必要以上に大きな声で返答した。

こちらを警戒させない為か、それ以上向こうからは近づいて来なか

った。

相川達から彼らとの距離を詰め、その距離は自然に会話するに不由無い距離にまでなった。

見ると、男性も女性も相川達と同じ首輪を付けていた。

「あなた達も知らない間にここに連れられたんですか？」

「ああ、そうだ。だから警戒しなくて良いんだ。僕も彼女も気付いたらこの建物だったんだ。君達もそうだろう？」

相川の質問に答えたのはワイシャツ姿の男性だった。

話し方に角がなく、人柄の良さが伺える。

どうやら本当に誘拐犯では無さそうだ。

安堵する相川と中瀬。

「良かったね、幸貴くん。私達と同じ様な人と会えてさ」

心底嬉しそうな中瀬に相川は頷き返す。

「それはこっちも同じだわ。ねえ、おじ様」

「ああ、全くだよ」

傍らの女性に『おじ様』と呼ばれた中年男性は軽く頷き、ところで、と相川達に話を振った。

「君達は現状をどこまで把握しているのかな？」

「ほとんど分かってません。首輪のことも、この建物のことも」

相川は素直に返答した。

「じゃあ、まずは情報交換よね」

「あ、その前に自己紹介しませんか？」

中瀬がやや遠慮気味に提案する。

「それも、そうね。私は陸島文香^{りくしまふみか}。職業は……ま、見ての通りって感じがしら」

陸島と名乗ったのは受付嬢のような格好をした20代半ばくらいの女性だった。

「僕は葉月克己^{はつきかつみ}。どこにでもいるサラリーマンってところかな」

『おじ様』は葉月と言うらしい。

「中瀬美那^{なかせみな}っていいいます。高校二年です」

「相川幸貴。高校二年です」

「うん、美那ちゃんに幸貴くんね。それじゃあ、自己紹介も終わって情報交換と行こうかしら」

「二人とも、こういうのが部屋にあったと思うんだけど」

葉月はポケットから手のひらサイズの電子機器らしき物を取り出した。

「それ、スマートフォンってやつですか？」

「いや、確かに携帯電話にも見えるがPDAと言っらしい」

「もしかして、これの事かな？」

中瀬は肩に掛けてあったスクールバッグから葉月の言う『PDA』を取り出した。

「ああ、それで間違いない。相川君、キミも同じような物が部屋にあっただろう？」

「いえ……有りませんでしたけど」

相川が返すと、葉月の表情が曇った。

文香はひどく驚いた様子で相川に迫る。

「ちょっと幸貴くん、それ本当なの？」

「え、ええ。俺が最初に居た部屋にはバッグと携帯と財布しか有りませんでした。それにバッグの中も確認しました」

「そう……。でも、見落としている可能性もあるし、とにかく幸貴君のいた部屋に行きましょう」

その声にはつい先ほどまでであった余裕は消え失せていた。

相川には文香が何故あんなに必死になるのか分からなかったが、とりあえず自分の居た部屋へ案内することにした。

目的の部屋はそこまで離れておらず、また目印を付けていたのも幸いして直ぐに見つかった。

四人は部屋に入ると、PDAの搜索を開始した。

ベッドの下や毛布の中、デスクの裏、考えうる場所を隈無く探したがPDAが見つかることは無かった。

「困ったわね。本当に無いなんて」

文香と葉月の表情は暗く、まるで人の死を憐れむかのようだった。

「そのPDAってそんなに大事な物なんですか？」

相川にとっては勝手に驚かれたり、落ち込まれたりで訳が分からなかった。

ふー、と息を吐いてから文香が口を開いた。

「幸貴くん、実は私達がここに連れて来られたのはある『ゲーム』をするためらしいのよ」

「ゲーム……ですか」

中瀬と会う前から妙な誘拐だと思ってはいたが、まさかこの状況が『ゲーム』の為のものなどとは想像していなかった。

しかし無理やり連れて来た人間をこんな風に放っておくような状況だ。

「『ゲーム』の為」くらいでしか説明がつかないのも確かではある。

その為か、相川はこの状況がゲームであるという話をすんなり受け入れることが出来た。

「そのゲームのルールがこのPDAには書いてあるの。そして、経緯は後で説明するけど私とおじ様はPDAに書かれたルールが真実だと実践んでいるわ」

はい、と相川は先を促した。

「その内の『ルール5』をまず読み上げるからよく聞いてて」

文香の読み上げた『ルール5』の内容は以下の通り。

（ルール5）

侵入禁止エリアが存在する。初期では屋外のみ。侵入禁止エリアに侵入すると首輪が警告を発し、その警告を無視すると首輪が作動し警備システムに殺される。また、2日目になると侵入禁止が1階から上のフロアに広がり始め、最終的には館の全域が侵入禁止エリアとなる。

時間制限と行動範囲の限定というゲームにはお決まり制約だ。

問題なのはペナルティ。

首輪が作動し警備システムに殺される

「こ、殺されるって……」

中瀬の声が少し震える。

「ええ。これは命懸けのゲームなの」

相川は強制的に参加させるようなゲームなんてロクなものではないだろうとは思っていた。

だから命懸けと言われてもあまり動揺しなかった。

誘拐された人間の命なんて弄ばれて当然の代物だ。

「でもそのルールを聞く限り、首輪を外さないと時間が来たら殺されますよね？外す方法はルールに無いんですか？」

「首輪の解除の方法は『ルール1』に書かれてるわ。今から読むわよ」

文香の読み上げた『ルール1』の内容は以下の通り。

（ルール1）

参加者には特別製の首輪が付けられている。それぞれのPDAに書かれた状態で首輪のコネクタにPDAを読み込ませれば外す事ができる。条件を満たさない状況でPDAをよみこませると首輪が作動し、15秒間の警告を発した後、建物警備システムと連携して着用

者を殺す。一度作動した首輪を止める方法は存在しない。

それは、自分のPDAを持たない相川にとってはあまりにも残酷な宣告だった。

第二話 「情報」

72時間以内に首輪を解除しなければ、死。

首輪を解除するにはPDAに書かれた条件を満たした上で、首輪にPDAをコネクトする必要がある。

「って事はアレですね。PDAを持たない俺はこのままじゃ首輪が作動してゲームオーバーになる」

相川の口調は随分ゆったりとしていた。

「ちょっと幸貴くん、状況が分かってるの!？」

相川の口調からは危機感というものがない、文香はそう思うと大声を出さざるを得なかった。

「ちゃんと分かかってるつもりです…。それより文香さん、他のルールも分かりますか？」

文香にはまだ言いたいことがあったがそれを飲み込んで相川の要求に応えることにした。

文香は胸のポケットから小さく折り畳まれた紙を取り出す。

「一応、この紙に全てのルールがメモしてあるわ」

「写させてもらってもいいですか？」

「構わないわ」

相川は文香から紙を受け取ると、バッグからペンとルーズリーフを取り出し、それを写す作業に入った。

相川とて命綱とも言えるPDAが無い状況を楽し観視している訳ではない。

ただ、本来はゲーム参加者には全員に配られるであろうPDAが自分には無かったという事がどういう意味を持つかはハッキリしていない。

落ち込むのはまだ早い。

「で、でもこのルールが本当かどうかなんて分からないじゃないですか」

中瀬の言う通り、そもそもこのルールの信憑性も分からないのだ。

相川には悲観的になるよりも先にやらなければならない事がたくさんある。

「確かに、美那ちゃんの言い分もごもっとも。でも、さつきも言ったんだけど…」

「そのルールが本当だという根拠があるんだ」

文香の言葉を引き継ぐように葉月が続いた。

「実は、僕と文香くんは相川くんや中瀬さんと会う前に色々な人と

会ってる。少し長くなるが大事な話だ。しっかり聞いて欲しい」

はい、と返事を返す中瀬。

作業こそ止めないが、葉月を見て首を縦に振る相川。

二人の反応を確認した葉月は、軽く咳払いをして続けた。

「僕は目を覚ました後、すぐに建物の探索を開始した。もちろん、PDAを持ってね」

その言い方はPDAを持たない相川に対する皮肉のようにも聞こえる。

そう感じた葉月は、「ああ、すまない。皮肉のつもりじゃないんだ」と付け足した。

「探索を開始してから10分くらいしてからだったかな、この建物で初めて人に会ったのは。郷田さんっていう40歳くらいの女性だね。彼女も首輪をしてたし、一緒に行動することになったんだ。そうして、二人で歩いているとね、あることに気づいたんだよ」

「ある事、ですか」

相川がペンを止める。

「ああ、実はこのPDAにある地図なんだが……」

「地図？」

中瀬は自分のPDAの画面に目を落とす。

「多分、『地図表示』っていう欄があると思うんだが。それにタッチすれば地図が表示される」

「これ……かな？」

中瀬がPDAの画面に人差し指で触れると画面が切り替わった。

その画面は地図というよりも迷路という方が相応しいように思えた。地図によるとこの建物は六階建てらしい。

「その地図はこの建物の地図だ、かなり歩いて確認したから間違いないと思う。現在地も確認できてる」

へえー、と感心したように呟く中瀬。

「話を戻すけど、その後、僕と郷田さんはこの地図の意味に気付いてすぐにまた別のゲームの参加者に遭遇したんだ」

「文香さんですか？」

「いや、漆山という僕と同じくらいの歳の男の人でね、彼も首輪をしていた。それから三人で行動することになって30分くらいしてからだな、漆山さんが落とし穴に引っ掛かったのは」

「落とし穴？この建物にですか？」

「ああ、漆山さんの歩いていた床が突然無くなった……いや、開いたんだろうね。彼が落ちてしまう前に何とか腕を掴んだんだが、僕

と郷田さんでは彼を引つ張り上げることが出来なかった。このままでは三人とも落ちてしまふ、という時に文香さん達が来て、助けてもらったという訳さ」

「そうだったんですか」

「文香さんは手塚くんや麗佳さんと一緒に行動していたんだが……。なんでも、三人は下手をすれば命に関わるような罠を見ているらしい」

「命に関わる罠？」

「詳しいことは、本人から聞こうじゃないか」

葉月は文香に視線を向け、説明を求めた。

文香はそれに応えるように頷き、話を始めた。

「私もおじ様と同じように、探索をしていたらまず麗佳ちゃんっていう子に会って、その後に手塚って男に会ったわ。三人で歩いていると、麗佳ちゃんが床の妙な出っ張りを踏んだみたいでね、そのせいで罠が発動って訳」

「漆山って人も何か罠を働かせるようなことをしたんですか？」

「いや、分からないな。その後の漆山さんは随分と気が動転していたし」

相川の疑問に葉月が答える。

「そうですか。それで、文香さん達が見た罫ってというのは？」

「壁から刃物が飛んでくるっていう代物よ。幸い、誰にも当たらなかったけど運が悪ければ死人が出てもおかしくなかった……と言えるわね」

「なるほど……地図は本物、仕掛けられた罫は命を奪いかねないような物もある。確かにルールは信じた方が良さそうですね」

相川にとって、それは本来なら絶望的な現実のはずだが、そんなことは一切感じさせない物言いだった。

ルールが真実だとしても相川が生き残れないと決まった訳ではない。

（ルールが本当なら、その上で生き残る方法を探すだけだ。こんなゲームで死んでいられるか…）

活路はある。

「それで葉月さん、文香さん達と合流した後はどうしました？」

「漆山さんを助けた後は、六人でルールを教え合うことにしたんだ。ルール2にも書いてあるが、ルールは複数人が協力しないと集まらないからね」

ルール2の内容はPDA記載されているルールについてである。

このルールによるとルールは全部で9個。

それぞれのPDAに記載されているルールは4つ。

ルール1とルール2は全てのPDAに共通して記載されているらしい。

「ルールを教え合っている途中に長沢って子が来て、結局七人でルールを交換したのよ」

「ルールを交換した後は？」

「ルール交換した後は皆バラバラになってしまったよ。我々のことが信用出来ないらしい」

「その後はずっと二人で？」

「いいえ、相川くん達と会う少し前に、かりんちゃんって子に会ったんだけど、ルールを教えた後に別れたわ。私達は一緒に行動したかったんだけど、彼女は一人で行動したいらしくてね」

「その後、相川くんや中瀬さんに会ったという訳さ」

葉月がまとめるように言った。

「そういえば、美那ちゃん達は私達と会う前には何かなかった？誰かと会ったり」

「俺は中瀬さんと会う以外は特に……」

「私は一人会いました、じゃないや、見ました、っていう方が正解かな」

「話はしてないの？」

質問する相川の手はペンを持ったまま忙しく動いている。

「うん、遠目で軽く見ただけ。あっちは私に気付いて無かったと思うし」

「どんな人だった？」

「大柄な男の人だったと思うけど」

「美那ちゃん、もしかして帽子を被った金髪の男じゃなかった？」

「いえ、金髪でもなければ帽子もなかったと思いますけど…」

「そう……。手塚じゃない、って事は私達の知らない誰かってことかしらね、おじ様？」

「そうなるだろうね」

「まあ、これでお互いの情報交換は大方終了ね」

実際には交換というより、葉月と文香が一方的に情報を開示する形になっていたのだが…。

「文香さん、メモ貸して下さってありがとうございます」

相川は筆記用具をバッグにしまい、借りていたメモを文香に返した。

全てを写し終えたらしい。

相川はルーズリーフの内容を改めて読み返した。

ルールは1番から9番まであり、全てを完璧に把握するのは中々に骨が折れそうだった。

特に、ルール9はこのゲームの参加者13名全員の解除条件を記したもので、情報量は他のルールの比では無かった。

解除条件は、単に生き残るだけのものもあれば、PDA関係や首輪関係、他の参加者を殺害するといったものもあった。

ルールを簡単にまとめると、この広い六階建ての館内で72時間という制限時間の中、13人の参加者が各々のPDAに書いてある解除条件をクリアするために殺しあったりPDAや首輪を奪いあったりするゲーム、ということらしい。

もちろん、これら以外の細かいことまでルールには記載されている。

相川がルールの内容に目を通してしていると、中瀬が斜め後ろから除き込もうとしているのが視界に入った。

彼女は未だ全てのルールを把握してはいないのだ。

それに気付いた文香は先ほどまで相川に貸していたメモ用紙を中瀬に手渡した。

「返さなくていいわよ、美那ちゃん。私はもう大体覚えたから」

「あ、ありがとうございます」

「それにしても、これからどうする、相川くん？」

「どうするとは？」

相川はルーズリーフの内容を捉えていた視線を葉月に向けた。

「だって、君は解除条件が分からないんだろう？」

相川はそうですね、と言おう

「でも、何とかするしかないでしょう」

と低く押さえた声で言った。

一瞬のことだったが、相川の瞳はこれまでに無い鬼気迫る色を帯びた。

「とりあえず、一方的なお願いで悪いんですが……」

相川の表情からは先ほどの鋭さは無い。

「出来ればいいんですが、皆さんの解除条件を教えてくださいんすよ」

「僕達の解除条件を、かい？」

「ええ、俺は自分の解除条件が分からないんですが、自分のPDAが5のPDAかどうかだけは知っておきたいんす」

5のPDAの解除条件はこの六階建ての館内の指定されたチェックポイントを通過すること。

チェックポイントは基本的に5のPDAにしか表示されていない。

相川のPDAが5のPDAであった場合、PDAを入手するのが一階が侵入禁止になった後では一階のチェックポイントを通過出来ないので首輪の解除が不可能になる。

そのため、相川のPDAが5でない保証があれば自分のPDAを探すのをそこまで急ぐ必要は無いが、逆に5のPDAであるという可能性が捨てきれない内は自分のPDAを見つけることに全力を尽くさなければならない。

相川のPDAが5である確証があるかないかで随分と状況が変わってくるのだ。

だからPDAが5でない確証を得るために他人のPDAの解除条件を確認したい。

他人のPDAの番号に5があれば自分のPDAは5でないという確証が得られる。

その上、他人の解除条件を知ればある程度は自分の解除条件を特定出来る。

「そういうことなら」と、中瀬は相川にPDAを差し出した。

PDAの画面に表示されていたのは絵札のランプ。

それはハートのQだった。

相川はルールに書いてあったジョーカー、カード、といった単語が気にはなっていたがどうやらこういう事らしい。

言わば、PDAはトランプなのだ。

だからこそ13人の参加者に番号のついたPDAを配布したのだらう。

（妙に洒落た真似をするもんだ…）

「私のPDAはQ。ゲーム開始から71時間後まで生き残ることが条件だよ」

他の参加者と争う必要の無く生き残るだけという単純な解除条件。

だからだろうか、中瀬の表情は明るかった。

相川が画面を確認し「ありがとう」と、中瀬に礼をした直後に文香がPDAを差し出して来た。

PDAに表示されていたのは中瀬の時と同様にトランプの柄と数字。

ダイヤの6だ。

「JOKERのPDAの偽造が五回以上行われることが解除条件よ」

JOKERとは他のPDAに偽装可能な特殊なPDAだ。

当然、ルールにその詳細は記載されている。

文香は相川が画面を確かに見たのを確認するとPDAをポケットにしまった。

それと入れ代わるようにして葉月はPDAをポケットから出し、相川に画面を提示した。

「これだろう、君の見たがっているPDAは」

葉月のPDAの表示はスペードの5。

相川が見たかった解除条件だ。

三人の誰かが5のPDAを持っているのが理想的とはいえ、望みは薄かった。

持っていない確率の方が高いのだ。

しかし幸運にも葉月のPDAは5番で、相川のPDAは5でない確証が得られた。

5以外の解除条件ならゲーム後半にPDAを入手しても解除の余地はある。

「ありがとうございます、葉月さん。これで随分楽になります」

事態が好転した事が嬉しい相川とは対照的に文香の表情は冴えなかった。

「それでも実際、幸貴くんのPDAは分からないままなのよね」

「いや、でもPDAを手に入れるのは無理でも手掛かりくらいなら手に入るかもしれません」

「え、どうやって？」

相川は文香の質問に対し、気まずそうに咳払いをした。

「どうしたんだい、相川くん？」

「いやですね、PDAの解除条件に三人殺せ、とか24時間以上誰かと行動しろとか書いてるんだから当然、ゲームを仕向けた奴らはこちらが見えてるんですよ？」

「そうなるだろうね」

「という事は、音声もゲームの運営者は聞ける可能性がある。それを利用してこちらから運営側にコンタクトを取れないかなー、と」

「なるほど、なら遠慮する必要は無いんじゃないかい？」

「いや、そうなんですけど。断り無しにいきなり声を挙げて、この場にいる誰かに話しかけたりしたら変な目で見られるかなと思って……」

つまり、先ほどの咳払いはそういうことらしい。

なるほどね、と文香が笑うのが聞こえる。

「でも、もう気にする必要はないだろう?」

葉月の言う通り、断りさえすれば問題は無い。

相川はそうですね、と返事をしてから軽く息を吸い込んだ。

そして、この場にいない誰かに訴えるように声を挙げた。

「おい、このゲームの運営者、聞こえてる筈だ! 状況も把握している筈だ! 俺に配られるべきPDAが無い! これはお前らのミスなんじゃないか!? だとしたらとるべき対応ってものがあるんじゃないか!??」

相川の声だけが部屋に響く。

そして少しの静寂の後、この場にあるPDAから一斉にアラームが鳴り始めた。

四人は何事かと思い、PDAに注意を向ける。

PDAが表示していた 解除条件の画面は強制的に別のものへと変わった。

その画面に表示されていたのは二頭身のガボチャの怪人が踊るアニメーションだった。

アラームが鳴り終わると、代わりにガボチャ怪人のダンスに相応しい軽快なBGMが響き始めた。

程なくして、ガボチャは踊りを止め、喋り始めた。

『やあ、僕はジャックオーランタンのスミスだよ。ヨロシク!』

機械で加工された耳障りな声だった。

相川達は何も返さないでいたが、スミスは構わず話を続けた。

『何やら僕達にミスがある、なんて事で抗議があったみたいだけど?』

どうやらこのカボチャはゲームを仕掛けた奴等の仕業で間違いなさそうだった。

「ああ、本来ゲーム参加者全員に配られるべきものが無かったんだ、当然だろう?」

機械音声に対応したのは相川だった。

『うーん、確かに君はPDAを手に入れられなかったみたいだね。でも、僕たちは確かに君の部屋にPDAは配置しておいたよ』

「つまり、俺が寝ている間にPDAを奪っていった奴がいると?」

『そこまでは言えないよ。僕たちが言えるのはこちらにミスは無かったって事さ!』

誰かが奪ったに以外にあり得ない、そう思いながらも相川は口にはしなかった。

「だがミスが無かった、で済ませるのか?」

『だって僕らはPDAを全員の部屋に配ったよ、確實さ！』

「俺が寝ている間にPDAを奪われたのはゲーム参加者の行動開始時間に誤差があるからだ。そしてその誤差を埋める対策をお前らは急った」

『そんなこと言われるとは心外だね。まあ、キミが特別に不利な状況は可哀想だから多少のことはしてあげてもいいよ。僕らも鬼じゃないしね！』

「じゃあ、俺の解除条件を教えてください」

『流石にそこまではするのはNGかな。もうちょっと手頃なお願いじゃないとね』

「じゃあ、どのPDAにどのルールが載っているのか知りたい」

『それもちよつと手頃なお願いとは言えないよ』

渋るガボチャ。

「じゃあ、お前が俺のPDAに何のルールが載っていたかを教えるつてのはどうだ？」

『それでもキミのPDAが殆ど特定されちゃうからね』

異なる二つの番号のPDAに載っているルールが全く同じ、ということはない。

したがって、載っているルールが分かってしまうと、PDAのルール欄を見ればそれが相川のものかどうか分かるのだ。

とは言え、どこまで洩る気だこのガボチャは、というのが四人の総意ではあった。

「それならこれだけでいい。俺が指定した二つのルールが俺のPDAに載っているか、KのPDAに俺が指定した一つのルールが載っているかの計二つを教えてくれ」

『それって計三つになってる気もするけど……。しかし、うーん……そのくらいなら面白くなりそうだし……。いいよ、教えてあげるよ！』

「よし、じゃあまず俺のPDAについてだ。ルール8、ルール9が載っているか？」

『えーと……いや、どっちも載ってないよ』

「じゃあ、KのPDAについてだ。ルール8は載っているか？」

『この質問、何か意味でもあるの？』

「意味があるかどうかはこちらで判断する」

『ふーん、まあいや。これも載ってないよ、残念だったね』

「どうだろうな」

『じゃあ、これで慈悲深い僕の救済措置もおしまい！不利な状況で

もめげずに頑張ってね』

スミスの言葉を合図にPDAの画面は本来の表示に戻った。

数瞬の静寂の後、全く腹立つガボチャだったわね、と文香が切り出した。

「いや、でもある程度は進歩したんじゃないかな。相川君のPDAにはルール8とルール9は載ってない。これは結構な収穫だったと、僕は思うけどな」

「そうですね」

「それでも、PDAのルール欄を見てこれが幸貴くんのじゃない、っていうのは分かっててもそれ以上は分からない訳で……」

「そんな事はないよ」

相川は中瀬の言葉を簡単に否定する。

「どういう意味だい、相川君？」

相川は、ええ、と軽く笑顔浮かべた。

そして次の一言は葉月達にとって予想だにしないものだった。

「実は、今のやりとりで俺のPDAを奪った奴のPDAが分かるんですよ」

第三話 「ルール」

スミスというカボチャ怪人とのやり取りで得た情報は、相川に配られたPDAにはルール8、ルール9の両方ともが記載されておらず、KのPDAにはルール8は記載されていないというものだった。

ルール9は首輪の解除条件の一覧、ルール8はゲーム開始から六時間は全域を戦闘を禁止にするというものだ。

そして、この情報で相川のPDAを奪った人間のPDAを断定出来るかと相川は言う。

「本当なの、幸貴くん!？」

声を挙げたのは文香だけだったが、葉月や中瀬も文香と同じ心境だった。

相川は軽く苦笑した。

「すみません、言い方がちよつと大袈裟でしたね。分かるのは俺のPDAを奪った犯人に配られたPDAに載っているルールです」

「いえ、そうだとしてもよ…」

文香達にはPDAに記載されているルールですら断定出来るとは思えなかった。

「詳しく話す前に皆さんのPDAのルール欄を見せてもらえますか？ 疑うようで悪いんですが……」

『疑うようで』の意味がいまいちピンと来ない文香達だったが、ルール欄を見せることは承諾した。

葉月のPDAに記載されていたルールの番号は、1、2、3、9。

文香のPDAには共通の1、2番以外に4番と5番。

中瀬のものは1番、2番、5番、8番だった。

相川はその全てを確認すると納得した様子で頷いた。

「疑うような真似してすいませんでした。問題無さそうです」

そう言われても文香達には相川が何故そう判断したのかも分からなかった。

「それじゃあ、どうして俺のPDAを奪った奴のPDAに載っているルールが分かるのか話したいと思います」

葉月、文香が半信半疑といった様子で頷く。

対照的に中瀬は期待に満ちた表情で首を縦に振る。

相川はそんな彼らの様子を確認し、話を続けた。

「俺のPDAを奪った奴……そうですね、『犯人』とでもしましょうか。この『犯人』はPDAを取って行っただけからルールが真実だった場合を考えて動いています。それで、まずハッキリさせたいのが『犯人』が複数犯か単独犯か、です」

「おそらく、単独犯でしょうね」

返したのは文香だった。

「『犯人』が複数でも、幸貴くんのPDAを入手出来る人間は一人だけ。だから、入手出来ない方の人間が犯行を許すとは思えない」

「しかし文香くん、『犯人』の連れが相川くんのPDAを手に入れた人間と今後も協力するつもりだったかもしれないじゃないか。だとしたら犯行を許しても不思議じゃない」

葉月が異議を唱える。

「でも、まともな神経の持ち主なら他人のPDAを奪う奴を信頼して一緒に行動しようとは思わないわ」

「それも一理あるが……」

「そもそも、他の誰かが見ている中でPDAを奪おうとする事や提案する事が考えにくいわ。そんな事しても反対されるのは目に見えてる上に信用出来ない人間と判断される」

相川が文香の考察に同意するように頷く。

「そうですね。それに『犯人』にとって人に見られる状態での犯行はデメリットが大きい。犯行を見ていた奴が『犯人』の犯行の情報を漏らすと、PDAを集めている参加者や俺に狙われる、仲間を組もうにも犯行を知った参加者には信用されない、なんて事になりかねません。だから『犯人』は誰かが見ている中ではPDAを奪いに

くい」

「確かに、そう考えるとそうだね」

葉月が難しい顔をしながら頷く。

「それに思い出して下さい。葉月さんと文香さんは単独で行動していた六人の人達と会っていますよね？」

「そうだね、僕達は郷田さんと漆山さん、麗佳さんと手塚くん、それに長沢くんとかりんちゃん計六人が一人で行動していたのを見ているよ」

「それに中瀬さんも一人で歩く男の姿を見ていることを考えると、俺達の知らない所で複数で行動出来たのは二人だけです」

ルール3やルール4によれば、ゲームの参加者は13人。

文香達が見てきた人間は七人。

七人と相川達の四人を除くと残りは二人のみとなる。

しかも、七人は全員が単独で行動をしていた為、相川達の知らない所で接触できた参加者はその二人に限られる。

「という事は、ただでさえ考えにくい複数犯という説は残る二人が都合よく接触してる場合に限られるんですよ」

「そうね。そう考えると『おそらく』というレベルではなく、ほぼ間違いなく『犯人』は単独犯だわ」

「それと、『犯人』が単独犯という事は『犯人』は俺のPDAを奪う前には誰とも接触をしていないと思うんですよ」

「どうしてだい？」

「文香さん達が会ってきた七人が単独で行動するようになったのはルールの信憑性を認め、全てのルールを把握したからだと思うんです。ルールが信じ切れないなら一緒に行動するでしょうし、ルールを信じていてもゲーム開始から6時間は戦闘禁止だから、ルールを全て把握する前にあわてて単独になるメリットは薄い」

「確かにそうだろうね。実際に、ルールを交換するまでは一緒に行動していた訳だしね」

「となると、俺がまだ目を覚ます前に単独で行動していた人間は全てのルールを把握して、他の参加者と別れたか、もしくは誰とも接触していなかったかの二択になりますよね。そしてそれは単独で俺の部屋に来たであろう『犯人』にも当てはまる」

「つまり、『犯人』は幸貴くんのPDAを奪う前に全てのルールを知ってたか、あるいは誰とも会っていないか、ということになる訳ね？」

「はい。そして、文香さん達は確実にルールを全て把握した参加者を六人見えていますよね？」

「ええ。私とおじ様を除けば六人になるわね」

「ですが、その六人がルールを知った後で、俺の部屋に来てても時間

を考えると俺はもう目を覚まししている。つまり、その六人が『犯人』だった場合はルールを全く知らない状態でしか俺の部屋には来られない。では、残りの三人の中に『犯人』がいると仮定します。中瀬さんが見た男は単独だった。残りの二人では全てのルールを把握するのは不可能。このことを考えると、この三人も誰かと接触する前にしか犯行は行えない。要はどの道、『犯人』は誰とも接触しない内に俺のPDAを奪った、ということになる」

中瀬の、おおーという感嘆の声を聞きながら相川は話を続けた。

「それで、ここからが肝心なのですが……。そもそもPDAを奪って部屋を後にするというのは少し不自然に思いませんか？」

文香も葉月も怪訝そうな顔をする。

「不自然って、どこかい？」

文香と葉月にはその理由が分からなかった。

無論、中瀬も理解していなかったがその表情は相も変わらず期待に満ちていた。

「具体的に言うと、何故『犯人』は俺の首輪にPDAを差し込まなかったのか、ということですよ。ルール3が本当なら『犯人』の首輪を差し込むことで俺を殺せる。でも『犯人』はそうしなかった。PDAを奪ったという事はルールが真実だという前提で行動し、尚且つ俺を蹴落とすつもりだった筈なのに」

ルール3の内容は以下の通り。

ルール3

PDAは全部で13台存在する。13台にはそれぞれ異なる解除条件が記載されており、ゲーム開始時に参加者に一台ずつ配られている。この時のPDAに書かれている条件がルール1で言う首輪の解除条件である。各々に初期配布された以外のPDAを首輪を差し込むと首輪が作動する。

このルールが真実ならば他人のPDAを差し込まれた首輪は作動する筈なのだ。

そして首輪が作動すれば当然ながら相川が今生きている訳が無い。

しかも首輪のコネクタ部分は体の正面側、ちょうど顎より少し下あたりにある。

相川は仰向けに寝ていたので、『犯人』は簡単にPDAを首輪にコネクタ出来た筈だ。

「いや相川くん、もしかしたらPDAを接続したのに首輪が作動しなかったのかも知れないじゃないか」

相川は首を横に振る。

「首輪が作動しなかったら、ルールが嘘だと分かり、俺を起こして協力しようとする筈です。ルールが嘘だとは分かるが、PDAだけは持ち去るというのは不自然過ぎます」

「なるほど……」

「考えられる理由は一つ、『犯人』のPDAにはルール8が記載されていたから……だと思います」

ルール8はゲーム開始から六時間は全域を戦闘禁止にするというものだ。

『犯人』は誰ともルールの交換をせずに相川の部屋に侵入していた筈だ。

そうになると、『犯人』は自分のPDAでルール8を知ったという推測が成り立つ。

「つまり、『犯人』はPDAを首輪にコネクトさせる事が戦闘行為になると判断したという事かい？」

「判断したというよりも、警戒したというのが正しいと思います。

『犯人』もPDAを差し込むのが戦闘行為とみなされるとは確信しなかったでしょうが、万が一という事を考えたんでしょうね」

「そうになると、この『犯人』は相当慎重な人間よね」

「そうです、そしてその慎重な人間がPDAを奪った。そもそも、PDAを盗むなんていうかなり反則くさい事ですよね。しかも寝ていた相手のPDAを、それも戦闘禁止も解けてない状況でやっているんですよ。ルールを全て把握しない内に」

「何か理由がありそうね」

文香は顎に手を当てる。

「理由は、PDAを奪うメリットを知っていて、奪っても大丈夫だ

という確証とは言わないまでも、根拠があったからだと思います」

うんうん、と嬉しそうに反応する中瀬。

文香はそんな中瀬を横目に見ながら口を開く。

「でも、その根拠はどこからくるのかしらね？」

「『犯人』のPDAにはルール9が載っていて、それを見たから、だと俺は思います」

「ルール9は確か、首輪の解除条件の一覧だったね」

葉月は自分のPDAの画面に目を落した。

「ええ、この中の2、6、8のPDAの条件を見ればPDAが自分の解除条件とは関係無くとも、PDAが交渉に使えると判断出来る。つまりPDAを奪うことのメリットを知れる。しかし、これらの解除条件は厳密には他人のPDAを奪わなくとも達成出来る。これを見てもPDAの取り合いがルール上、セーフかは分からない」

『2』の条件はJOKERの破壊、『6』はJOKERの偽造効果が五回以上、そして『8』は五台のPDAを破壊。

一見、他人の持つPDAを奪わなければならない条件に思えるが、厳密には奪わずとも達成可能である。

「それに、PDAの略奪が認められていたとしても戦闘禁止のように時間による制限があるかもしれない。しかし、決め手のなるのが『K』の解除条件」

『K』の解除条件は以下の通り。

PDAを五台以上収集する。手段は問わない。

「PDAの五台以上の収集、これでPDAの略奪が認められていることが判明する。しかも『手段は問わない』ときたもんだ。これでおそらく『犯人』は不明瞭なルールに恐れずに犯行に及んだでしょう。実際は『手段は問わない』なんてのは詭弁だった訳ですが、『犯人』はこれがある程度信用したんでしょう」

「成る程ね、さっきの『スミス』とのやり取りでKのPDAにルール8が載っていないことが分かっているから、Kを持つ人間が自分の解除条件とルール8を見て犯行するのは不可能。幸貴くんのPDAにルール8、9は載っていないから『犯人』が相川くんのPDAのルール欄を見たとしてもルール8、9は得られない」

KのPDAを持つ者はルール9を知らずともPDAを奪うことが認められていると判断出来る。

しかし、KのPDAにはルール8が載っていないのでKのPDAの持ち主は『犯人』ではないと考えることが出来る。

「はい、PDAのルール欄はPDAを手にとらず、つまり略奪せずにボタンやタッチだけで見れます。だから『犯人』がKの解除条件を知らずとも、俺のPDAのルール欄を見るかとは思ってたんですが」

「でも、相川くんのPDAにはルール8もルール9も載っていない。しかも『犯人』のPDAはルール8の載っていないKではない」

「そうですね。つまり、犯人のPDAのルール欄にはルール8とルール9が載っていることになる」

それが相川の推理の結論だった。

一つのPDAに与えられているルールはルール1、ルール2以外には二つ。

よって『犯人』のPDAのルール欄が完璧に判明したことになる。

おおー、と感心したような声を挙げる中瀬。

「だからさつき、僕たちは『犯人』でないと判断したのか。しかしこの事を考えた上で『スミス』にあんな質問を？」

「ええ、一応」

「しかし、運が良かったわよね。幸貴くんのPDAにルール8、ルール9が載っていたらここまで推理出来なかった」

「いえ、そんなに幸運という訳ではありませんよ。どちらも載っていない確率は50%近いです。それに片方載っていて、片方載っていない場合でも『犯人』のPDAと俺のPDAのルール欄のどちらもある程度分かる訳です。そもそも理想はどちらも載っていた場合です。これなら俺のPDAが完璧に断定出来ますからね。まあ、こちらの可能性は5%ありませんが」

「つまり、『スミス』がどう答えても悪くはないって事か。いやはや、大したもんだ」

「ホントだよ、幸貴くんすごい!!」

相川の説明が始まってからろくに口を開かなかった中瀬が相川の手を握り、上下に降る。

もつとも、口をあまり開かなかったと言っても、おおー、とか、なるほどー、などと呟いていて大人しかった訳ではないのだが…。

「いや、でも不安要素もあるんだよ」

「不安？」

中瀬は相川の腕を上下させていた手を止めた。

「うん。JOKERを持った人間が他のプレイヤーと接触無しでどこまでルールを把握出来るかってことなんだけど…」

「なるほど、JOKERは自分の首輪解除の為のPDAに載っていないルールまで教えてくれるのかってことね？」

「ルール2には五、六人が協力すればルールが揃うと書いてある。最初、これを読んだ時はJOKERを持っても一人で知れるルールの数に違いは無いのだと思ったんです。でも厳密には五、六人でルールが集まるとは書いてるが一人で全部を知る事は出来ないと書いてない」

「まさか……JOKERはルール欄まで偽造するのかしら？」

「そう……かもしれないという事ですよ。そうでなくともJOKER

Rにはきちんと四つのルールが載っているなら、『犯人』の首輪解除の為のPDAにルール8とルール9が載っている必要が無くなる。まあ、『犯人』が都合良くJOKERを持っていた場合ですが……」

「そうね。でもJOKERのルールがJOKERを持っている人間のPDAに載っているものと同じになっているかもしれないわ。一人で知れるルールの数を統一するためにね」

「俺もその可能性はあるとは思いますが。あと、JOKERが最初に俺に配られていたとしたら、なおその可能性は高いでしょう。スミスが俺のPDAにはルール8とルール9が載っていないと言ったのはJOKERも例外でない筈。なら、JOKERのルールとJOKERでない方に載っていたルールが完全に一致している可能性が高い」

「でもどっちにしろ、文香さんの為にJOKERは必要なんだし、やる事はあんまり変わらなじゃない？」

議論に割り込む中瀬。

「まあ確かに、行動方針そのものはあんまり変わらないけどね」

「どの道、考えたってJOKERが手元に無い限り分からないし、そろそろ移動を始の方がいいかしらね」

「そうだね、そうしよう。移動しながらでも考えるのは出来るさ」

葉月の言葉を合図に四人は部屋を出た。

第四話 「関係」

部屋を出て真っ先に口を開いたのは文香だった。

「さて、まだ正式に決めては無かったけど、この四人で協力していくって事でオッケーよね？」

文香と葉月は以前から協力関係だった。

問題は中瀬と相川がこの二人と組むかということだが……。

中瀬と相川はほとんど同時に「はい」、と首を縦に降った。

中瀬は以前からの知り合いである相川を信用していたし、葉月と文香もこれまでの事から信用できる人物と考えていた。

協力は自分から申し出たいくらいだった。

相川も同様に、中瀬のことは良く知っているし、信用して良いと考えていた。

葉月と文香の方は完全に信用とはいかないが、二人首輪の解除条件は争いが必要でないし、利害を考えずに解除条件を明かしてもくれた。

二人がJOKERを隠し持っているという場合を除けば、ほぼ信用仕切ってしまうって問題ないと判断した。

裏を返せば、JOKERが見つかるまで完全には信用出来ないと考

えていることにもなるが。

「それじゃあ改めてよろしくね、美那ちゃん、幸貴くん」

「こちらこそよろしくお願いします、文香さん、葉月さん」

「ああ、四人で協力して無事に首輪を外そう」

「そうですね、四人揃って家に帰りましょう！」

四人が思い思いの決意を口にする。

「さて、まずはおじ様の首輪解除の為に一階にあるチェックポイントを周りましょう」

「悪いね、僕の解除条件に付き合わせてしまって」

「何言ってるんですか。そんなお互い様じゃないですか」

笑顔で返す中瀬に続いて相川も口を開いた。

「そうですね葉月さん、気にしないで下さい。いつか俺の解除条件に付き合わせることもなるでしょうし」

相川の首輪の解除条件は判明していない。

だが、必ず自分のPDAを見つけ出し首輪を解除する、相川の言葉はそういう意志の表れだった。

「すまないな、皆」

葉月の表情が僅かに緩む。

「それでおじ様、チェックポイントがどういう風に配置されてるか二人に説明してあげた方がいいじゃないかしら？」

二人に、ということは文香は既に葉月から説明を受けているのだから。

そうだね、と文香に返してから葉月は説明を始めた。

「チェックポイントは全てで24箇所。ワンフロアに4個ずつ配置されている」

葉月は自分のPDAを軽く操作してからその画面を相川達に示した。

「これは一階の地図だが、見れば分かる通りチェックポイント間の距離は結構なものだ。他のフロアも似たようなものでワンフロア分通過するだけでも中々大変だろう」

葉月の差し出したPDAの画面は以前にも相川達に見せたこの建物の地図が表示されていた。

しかし、地図には以前には無かった点が表示されており、これは中瀬のPDAにも文香のPDAにも表示されていない物だ。

解除条件に必要なチェックポイントを表示する5の特殊機能だ。

点には赤いものが三つ、青いものが一つあった。

「えっと、この赤いのと青いのがチェックポイントでいいんですか？」

「ああ、赤い点はまだ通過していないチェックポイントで青は既に通過しているチェックポイントを示しているらしい」

「じゃあ、一つは既に通過しているんですか」

「ああ、たまたま僕の初期地点から近いものがあってね」

「それじゃ、とりあえず一階の残り三つを手っ取り早く通過してしまいましょ」

文香の言葉を合図に四人は移動を開始した。

移動中は葉月が先頭を歩いた。

葉月しかチェックポイントへの最短経路が分からない為だ。

葉月のすぐ後ろには相川、さらに後ろに文香と中瀬が並んで移動していた。

「そう言えば美那ちゃん、もしかして幸貴くんここに来る前から

知り合いだったりするのかしら？」

「えっ、どうしてです？」

「いや、何となくそんな気がしたのよ。違った？」

「いえ、幸貴くんとは中学で一緒でした。よく分かりましたね」

「やっぱり私の目に狂いは無かったわね」

えらく満足気な文香。

二人の前を歩く相川にもこの会話は聞こえていたが、会話に参加しようとはしなかった。

前の方を歩く葉月と相川は畏には特に気を払わなければならないからだろうか。

「中学が同じだったってことはクラスが同じだったりしたのかしら？」

「いえ、クラスは一緒になったことは無いです。でも、部活が一緒でしたから結構仲良かったんですよー」

「つまり男女の仲だった、そういう訳ね？」

言葉と同時、中瀬とその前を歩く相川の足が止まった。

それに合わせる為に文香と葉月も足を止めた。

「そ、そんな訳無いじゃないですか！」

中瀬は両方の手のひらを激しく横に振り、否定する。

文香はそんな中瀬の反応を楽しんでいるようだ。

「そんなムキになるとかえって怪しいわね。ねえ幸貴くん？」

「知りませんよ」

相川は少し気まずそうに答え、止まっていた足を動かし始めた。

それに続いて三人も歩き始めた。

「あら、いよいよ怪しくなってきたわよ？」

文香は意味深に笑いながら中瀬の方を見る。

「ほ、本当にそんなんじゃないですから」

「分かってるわよ、『冗談よ冗談』」

中瀬も相川も、本当に冗談のつもりなのだろうか、とは思ったが口にはしなかった。

「でも男女で部活が一緒ってことは二人とも文化部だったの？」

「いえ、陸上部でしたよ」

「なるほどー、陸上部か。確かに陸上とか水泳ってあんまり男女で

部を分けたりしないわよね」

中瀬が文香の言葉に応えようとしたその時だった。

その場にあるPDAから一斉にアラームが鳴り出した。

アラームは数秒の間鳴り続け、アラームが止まると変わりに機械で合成された声が告げた。

『お待たせしました、ゲーム開始から六時間が経過したので全域の戦闘禁止を解除します』

ついに全域の戦闘禁止が解除された。

これから先は、誰がいつ襲ってきてもおかしくない状況だ。

しかし状況が大きく変化したと言っても、あらかじめ分かっていたことだ。

四人は歩く足を止めたりはしなかった。

「戦闘禁止も解除されたし私達がいくら四人グループの大所帯とはいえ、そろそろ武器が欲しいわね」

「武器…ですか？」

武器が欲しいという文香の言葉は中瀬にとっては予想外のものだったらしい。

食料と水を探す方針にはなっていた。

それは四人が移動を始めて直ぐに話し合いで決まったことだった。

三日の間、この館から出られないのだ。

当然、食料や水が用意されている。

そう考えるが自然であり、相川達もまた、そう考えたのだった。

しかし、武器を探すなんて話は一度もしていない。

「ええ、首輪の解除条件に殺害が含まれている以上どこかにある筈よ」

もし武器が館内に無いとしたら、首輪の解除に素手で人を殺す必要のある参加者がいることになる。

それはあまりにゲームとして不親切だ。

「そうですね、俺も武器が全く無いとは考えにくいと思います」

「確かに武器は用意されているだろうが…やはり使わなければなら
ないんだろうか、こんな状況では」

出来れば使いたくない、そう言いたげな表情の葉月を見て相川は口
を開いた。

「仕方ないことですよ、

武器を持たなければ敵に対抗するのも交渉するのも難しい」

相川の首輪の解除条件は不明だが、少なくとも他の三人の解除条件

は殺人も人を襲うことも必要無い。

しかし襲ってくる敵に対しての対抗手段を持たなければ、ただ一方的にやられるだけなのだ。

「相川くんの言う通り、か……。使わずに済むと良いが、もしもの時の為に覚悟だけはしなくてはな」

葉月は覚悟を決めることにした。

「それじゃあ、食料と水はもちろんのこと、これからは武器も積極的に探すという方針で大丈夫ね？」

三人とも文香に同意する。

移動を続けること、一時間弱で二つ目のチェックポイントを通過した。

その間、相川達は武器や食料を見つけるために、移動中に見かけた部屋は積極的に調べてはいた。

しかし食料や水、実用性のありそうな武器は一つとして見つけられず、見つけられたものは何に使用するものかも分からないような物ばかりだった。

極端な例を挙げると、中瀬が大はしゃぎで見つけた「ハリセン」がある。

その時にあまりにはしゃぎ過ぎていたのか相川に「ハリセン」を引ったくられ、その「ハリセン」で頭に軽く一撃お見舞いされたりもしていたが…。

2つ目のチェックポイントを通過した直後、四人は新たな部屋を見つけた。

これまでの方針通り、入って調べることにした。

中は今までの部屋と同じように埃っぽく、大小様々な段ボールや木の箱が積まれていた。

「何か役立つ物が見つければいいんだが……」

葉月はあまり期待出来そうに無い、といった様子だった。

これまでの搜索があまり良い成果を挙げられていない為、期待感が薄れているのは当然とも言える。

「見つかりますって、きっと!」

「そうだね。俺もいい加減喉が渴いたし飲み物でも見つければいいんだけど」

「そうね。あることを祈って探しましょう」

四人は搜索を開始した。

相川達は今まで通り各自で木の箱や段ボールを一つ一つ開けるとい
う搜索方法とった。

段ボールや木箱を開ける音しか響かなくなり始めていた部屋に中瀬
の声が拳がったのは搜索を開始してから数分後のことだった。

「幸貴くん見て、良い物あったよ！」

『ハリセン』の時のように変な物を見つけて喜んでるんじゃない
だろうな、と思いつつも相川は声のする方へ振り返った。

みると中瀬が手招きしているので、やや急ぎ気味で近づいた。

「見て見て、これだよ」

中瀬が自分の足元にある、ランドセル2個分ほどの大きさの段ボ
ールを指差す。

段ボールは開封されていて、中身は水の入ったペットボトル、イン
スタント食品や缶詰めでいっぱいだった。

「相川くん、中瀬さん、良い物は見つかったのかい？」

やや遠くから葉月の声が飛んてくる。

「はい、食料と水が見つかりました。」

相川は明るい口調で答えた。

続いて文香の方からも声が拳がった。

「食料だけじゃなく、武器も見つかったわ」

文香の手には長さ1m弱ほどの鉄パイプと木の棒が握られていた。

その後、部屋からはそれ以上は目ぼしいものは見つからず、部屋から出る前に見つけたものをどうするかを話し合った。

話し合いの結果、食料と水は四人に均等に分けて持ち運ぶことにし、鉄パイプは相川が、木の棒は葉月が持つことになった。

「今までが運が悪かったのか、今回がたまたま運が良かったのか、まさか食料と武器がまとめて見つかるなんて」

「食料の方は二日分くらいはありますね」

言っと、相川は戦利品であるペットボトルの水を飲み始めた。

「鉄パイプと木の棒が見つかったけど、これって強い方なのかな？」

相川は中瀬の言葉を聞くと、ペットボトルから口を放して苦笑した。

「大丈夫、ハリセンよりは大分強いから」

中瀬はバツの悪そうな顔をしたが、文香と葉月は声を出して笑った。

部屋を出た四人はその後、特に問題なく一階の残り一つのチェックポイントを通過した。

これで一階の全てのチェックポイントを通過したこととなる。

四つ目のチェックポイントを目指す途中、地図上で二階へ続く階段とされる地点に寄った。

しかし階段はコンクリートやアスファルトの塊によって封鎖されていて、とてもではないが通れそうもなかった。

地図を見れば、四人の見た階段の地点には×印がされていた。

他にも二階へ続く階段とされる場所は三地点あるがその内二つは×印が記されており事実上、使用出来るのは×印のされてない一つだけだと相川達は結論した。

そして一階全てのチェックポイントを通過した以上、一階に居座る必要のなくなった一行は×印の無い階段へと向かっていた。

「しかし使用出来る階段が一つだけとは、参ったね」

葉月は軽くため息をつく。

「そうですね。それに、一つしか使えないとなると待ち伏せも怖い
ですね」

「確かに、好戦的な参加者が待ち伏せをしてもおかしくはない
わね」

ルール上、一階から順に侵入禁止エリアとなるので、当然ゲーム参
加者は上の階を目指さなければならない。

つまり階段は多くの参加者が通らねばならず、待ち伏せにはうって
つけなのだ。

上の階に行くには階段を使う以外にも建物に一つだけ設置されてい
るエレベーターを使うという選択肢がある。

エレベーターの設置場所は階段と同様にPDAの地図に示されてい
るため、簡単にたどり着けるが相川達はエレベーターを使用せず階
段のみで上の階を目指すと決めている。

何故ならエレベーターは極めて密閉された空間であるため階段と比
べてリスクが高い。

しかも葉月の首輪の解除には全フロアを隈無く移動する必要がある
ため、一気に最上階まで移動可能というエレベーター特有のメリッ
トが意味を為さないのだ。

目の前の角を曲がれば二階へ続く唯一の階段へ一本道、歩いて30
秒あるかないかの位置で移動を一時中断した。

もし二階の階段で敵が待ち伏せているなら、目の前の角を曲がれば敵に見つかってもおかしくはないのだ。

四人は慎重に行動する必要があった。

だから角を曲がってしまう前にどうやって階段へ向かうか話し合った。

とは言え、やれることは今までとあまり変わらず、武器を持った葉月と相川が先頭に立って進むしか無いのだ。

結局、いつもより慎重に、注意深く移動するだけで、他はいつもと変えずに階段を目指した。

結果から言うと、敵の待ち伏せは無かった。

階段へ向かう通路の途中も、階段を昇る際も四人以外の人の姿は無かった。

階段を上がりきった後も周りを警戒していたが人が襲ってくる気配は無かった。

「どうやら、待ち伏せは無いみたいだね」

葉月は、安堵の息を漏らした。

「そうみたいです。それで、これからどうしましょうか」

相川も安堵が隠し切れないようで、随分と気の抜けた声だった。

「どうするって二階の探索じゃないの？」

二階への昇りきると目と鼻の先に三階へ続くとされる階段があるが、こちらは封鎖されている。

PDAの地図にはおそらく×の印がされていることだろう。

三階へ向かうにしても、葉月の解除条件のチェックポイントを目指すにも二階をそれなりに歩く必要があるのだ。

「うん、それも選択肢の一つなんだけどさ」

「私達がここで待ち伏せしないかってことよね、幸貴くん？」

「そういうことです」

「待ち伏せ？どうしてだい？」

「いや、戦おうってんじゃないんですよ。ただ俺達は『犯人』やJOKERを持つ人間と接触しなきゃならない。その為に待ち伏せするのもアリかなと思っただけです」

『犯人』とは相川のPDAを奪った人間の便宜上の呼び名である。

この人間との接触は相川の首輪解除には必須で、同様にJOKERのPDAの持ち主に合わなければ文香の首輪解除は難しい。

「なるほど、そういうことだったら僕は反対しないよ」

葉月が納得したように頷く。

「私も待ち伏せは有効だと思うわ。私達は今まで大した武器を手に入れて無いけどそれは他の参加者も同じ筈。強力な武器があるのは上の階からなのか、ゲーム後半からなのかは分からないけど、少なくとも今は待ち伏せのチャンスだと思う」

「私も、待ち伏せしても良いと思う」

文香も中瀬も賛成した。

「じゃあ、ここですばらく待ち伏せするとしますか」

相川達は二階へ続く階段で待ち伏せすることにした。

第五話 「階段」(前書き)

ルール一覧があります。

原作のルールが大体頭に入っている人は読み飛ばしても差し支えありません。

ルール4には変更点がありますが、作中でその内説明があります。

第五話 「階段」

二階へと続く唯一の階段の段数は全部で三十段ほどあり、段は一段目から二階の床まで真っ直ぐに規則正しく続いている。

階段の手前は通路ではなく正方形に近いスペースがあり、このスペースを通らねば一階から階段へはたどり着けない。

PDAの地図にも記載されているが、この館内には通路やドアで仕切られた部屋以外にもこういったホールがある。

ただこの階段手前のスペースは他のホールと比べると明らかに小さく、ちょうど平均的な学校の教室くらいの広さである。

このスペースは階段以外に三つの通路と繋がっているため、スペースへ向かう参加者は基本的に三つの通路から一つを選択することになる。

もちろん、二階から階段を降りればこのスペースにたどり着けるので厳密には四つの通路と繋がっているとも言える。

スペースは階段の昇り切ったところから見下ろせば、ある程度は見通せる。

逆に言えば位置によってはスペースからも階段を昇り切った地点が見えるということになる。

つまり、二階で階段のすぐ側に陣取って待ち伏せすると階段を昇ろうとする参加者に気付かれるリスクがあるのだ。

しかし、階段の側でなければ待ち伏せしても相手に逃げられ易い。

加えて、階段前まで来た人間が二階にいる人間を見るには相当階段に接近した後でない限り、かなり姿勢を低くして見上げなければ難しいので見つかる可能性は低い。

そう判断した相川達は二階の階段の入り口の側で一階のスペースを覗きながら他の参加者を待つことにした。

待ち伏せは四人全員で行うのではなく二人組に別れて交代ですることにした。

壁の陰に隠れながら二階から一階を覗き見張る、なんてことは二人で事足りる。

見張りをしない二人は休んで体力を温存、回復させようという算段だ。

最初に見張るのは葉月と文香の二人で、相川と中瀬は見張りをして
いる二人から少し距離のあるところで休息を取っていた。

休息といっても、いつ誰が来るか分からないので寝て良いという訳でも無く、やることも無いので相川と中瀬はもう一度ルールに通り目を通すことにした。

ルール1

参加者には特別製の首輪が付けられている。それぞれのPDAに書かれた状態で首輪のコネクタにPDAを読み込ませれば外す事ができる。条件を満たさない状況でPDAをよみこませると首輪が作動

し、15秒間の警告を発した後、建物警備システムと連携して着用者を殺す。一度作動した首輪を止める方法は存在しない。

ルール2

参加者には1～9のルールが4つずつ教えられる。与えられるルールはルール1と2と、残りの3～9から2つ。およそ五、六人でルールを持ち寄れば全てのルールが判明する。

ルール3

PDAは全部で13台存在する。13台にはそれぞれ異なる解除条件が記載されており、ゲーム開始時に参加者に一台ずつ配られている。この時のPDAに書かれている条件がルール1で言う条件にあたる。各々に初期配布された以外のPDAを首輪を差し込むと首輪が作動する。

ルール4

最初に配られる13台のPDAに加えてジョーカーのPDAが一台存在する。これは通常のPDAとは別に、参加者にランダムに配られる。ジョーカーはランプのカードを他の13種のPDAとそっくりに偽装できる機能を持つ。制限時間などは無く、何度でも他のPDAに偽装可能だが、一度使うと一時間は偽装機能は使えない。偽装機能が使用中の場合、一度偽装を解除しないと偽装機能は使用出来ない。偽装機能を使用する際には8桁の数字のパスワードを設定する必要がある。このパスワードは偽装を解除する際に再び入力する必要がある。偽装を解除する際のパスワードはPDAの「パスワード入力」の欄を選択することで入力出来るが、JOKERだけでなく全てのPDAにこの欄は用意されている。JOKER以外のPDAにパスワードを入力してもパスワードは設定されていないためPDAに変化は無い。一度偽装を解除すると次に偽装を行う際には新たなパスワードを指定する必要がある。さらにこのPDAでコ

ネクトの判定をすり抜けることは出来ず、首輪の解除条件のPDAの収集や破壊にはカウントされない。

ルール5

侵入禁止エリアが存在する。初期では屋外のみ。侵入禁止エリアに侵入すると首輪が警告を発し、その警告を無視すると首輪が作動し警備システムに殺される。また、2日目になると侵入禁止が1階から上のフロアに広がり始め、最終的には館の全域が侵入禁止エリアとなる。

ルール6

開始から3日と一時間が過ぎた時点で生存している参加者全員を勝利者とし、賞金20億円を山分けする。

ルール7

指定した戦闘禁止エリア内で誰かを攻撃した場合、首輪が作動する。

ルール8

開始から6時間以内は全域を戦闘禁止とする。違反した場合は首輪が作動する。正当防衛は除外する。

ルール9

カードの種類と首輪の解除条件は以下の13通り。

A：QのPDAの所有者を殺害する。手段は問わない。

2：JOKERのPDAの破壊。手段は問わない。このPDAの半径1m以内ではJOKERの偽装は無効、初期化される。

3：三名の殺害。ただし、首輪の作動は含まない。

- 4…自分以外の首輪を3つ以上取得する。
- 5…館全域の24箇所のチェックポイントを全て通過する。特殊効果として地図上にポイントの表示がされる。
- 6…JOKERの偽装機能を五回以上使用。自分で行う必要も近くで行われる必要もない。
- 7…開始から6時間以降に全員と接触。死亡している場合は免除。
- 8…自分の半径5m以内でPDAを正確に五台破壊。六台以上破壊すると首輪が作動する。
- 9…自分以外の参加者全員の死亡。
- 10…首輪が五個以上作動すること。ただし開始から71時間以内とする。
- J…自分と24時間以上行動を共にした者が開始から71時間の時点で生存していること。
- Q…2日と23時間の生存。
- K…PDAを五台以上収集する。手段は問わない。
一通り目を通すと中瀬は、「あー、疲れた」と、ため息混じりに口を開いた。
「確かに、かなりの量がある」

相川も中瀬に同調する。

「特にルール4はJOKERのパスワード、偽装機能、偽装解除、もう目が回りそう…」

額に手をやる中瀬。

「ルール見てて何か気付いたことある？」

相川の問いに対して中瀬はうーん、と唸る。

「気付いたことは無いんだけど、もし2のPDAを持った人が仲間になってくれたら心強いねって思った。JOKERの偽装を解除出来るんでしょ、2のPDAは」

「味方にする分にはそうだけど、2のPDAの特殊効果も良い事ばかりじゃないと俺は思う」

「どうして？」

「まあ、色々な場合が考えられるってこと」

中瀬はふーん、と相槌を打ち、それ以上は追及しなかった。

二十分後。

見張りは相川と中瀬が引き継いだ。

葉月と文香が見張りをしている間は特に変わったことは無かった。

相川達が見張りを始めてもしばらくは何もなかった。

変化があつたのは相川と中瀬が見張りを始めて二十分近くが経過しようとしていた時だった。

「今、何か音がしなかった？」

中瀬が唐突に、しかし声を抑えて相川に尋ねる。

「そう？俺には聞こえなかったけど……」

相川も小声で対応した。

見張りをしている以上、大声は出せない。

「確かにしたと思うんだけど……」

「どこから？」

「多分、一階の階段手前のスペースから」

「どんな音だった？」

「人の足音みたいに聞こえた」

すぐ近くに人がいるかもしれないという事だ。

相川は警戒を強めた。

四人の方針として、人が来たら問答無用で制圧、とは行かない。

話し合いが出来るようなら話し合う。

戦闘を仕掛けられた際には、逃げられるようなら逃げる。

戦闘するのはその際に逃げられないと判断した場合のみだ。

四人で話し合ってそう決めてある。

と言っても、戦闘になる確率が低いという訳でもない。

相川が警戒を強めてから一分以上が経過した。

その間は相川も中瀬も一階の階段前のスペースを注視していたが、警戒していた他の参加者の姿は確認出来なかった。

「気のせいだったのかな」

自信の無い様子で呟く中瀬。

普通に考えれば階段前のスペースに誰かが来たのだとしたらその人間は階段を昇る筈だ。

ところが誰も昇ってくる様子は無い。

先に相手がこちらに気付いたとも考えにくい。

声は互いが何とか聞き取れるくらいに抑えていたし、一階から二階を見上げるには不自然なほど低い姿勢が要求されるのだ。

つまり、中瀬の聞いた足音のようなものは気のせいだと判断するのが一番自然な筈だ。

「一応、見に行ってみるよ」

相川は壁に掛けてあつた鉄パイプを右手に取る。

「私も行くよ」

中瀬は階段を降り始めた相川の後ろについた。

相川と中瀬は警戒したまま階段を降り続けた。

十中八九、人はいないと判断していたが、万が一というものがある。

階段を降り、一階のスペースを着くと、近くに人が隠れていないか確認することにした。

中瀬の聞いた足音が本物ならこの辺りに人が隠れている可能性が高い。

階段を降りる途中でスペースの全体が見えたので、スペースには誰も潜んでいないことは分かり切っていた。

問題はスペースと繋がる三つの通路。

その内の一つの入り口は階段を降りた相川達の真っ正面にあり、通路自体がしばらく一本道なのでかなり先まで見通せる。

軽く見ただけで誰も居ないことが分かった。

となると、残りは相川達の左と右に一つずつある通路。

二人はとりあえず、右に入り口のある通路から調べようと左の通路入り口に背を向け、右の入り口に向かって足を進めた。

二人が二、三步進んだところで背後から微かだが確かに音がした。

二人は急いで先ほど背を向けた通路の方を振り返った。

見ると、10歳くらいの少女が通路とスペースの境目あたりに立っていた。

明らかに無害に思える目の前の存在に対して相川も中瀬も警戒を解いた。

中瀬が聞いたという足音は彼女のものだったのだろう。

ここまで来て階段を上がらなかったのは、待ち伏せしている相川達に気付いたからだろう。

彼女の身長なら低い姿勢からでなくとも二階まで見上げられる。

相川は構えていた鉄パイプを下ろし、出来るだけ警戒されないよう

に、やんわりと声を掛けた。

「ゲームの参加者だよね？出来れば話し…

言葉は隣にいる中瀬の叫びに遮られた。

「幸貴くん！」

直後、相川の左の肩甲骨の辺りに強い衝撃が走った。

背後から何かが打ちつけられたのだ。

視界が揺らいだ。

痛みは動揺の後にやってきた。

相川はややバランスを崩しつつも、何とか背後を振り返る。

相川が状況を把握する間もなく、何かが相川の顔面に向かって飛んで来た。

咄嗟に右手の鉄パイプで受け止める。

金属バットがボールを叩いたような高い音が響いた。

バランスを崩し気味で、しかも片腕だった為か、相川は衝撃に押し負け、ヨロヨロと後退させられた。

後ろに下がると鉄パイプを持った中学生くらいの少女の姿が見えた。

持っている鉄パイプは相川と同じ物だろう。

少女が両手で持った鉄パイプを振り上げ、迫って来る。

相川は両手で鉄パイプを構え直す。

少女がパイプを思い切り振り下ろす。

相川はそれを鉄パイプでしっかりと受け止め、再び高い音が響く。

当然、条件がイーブンなら男の相川が少女に力負けしたりはしない。

今度は相川が少女を押し返した。

少女は先ほどの相川の様に後退しながら声を張り上げた。

「優希！今の内に」

それは相川が先ほど話し合いをしようとし、今は相川が背を向けている若い少女に向けられたものだった。

声を受けた少女は、うん！としつかりと返事をして階段へ向けて駆け出し、階段を上り始めた。

中瀬は迷っていた。

相川と少女の攻防にはあまりにも急な事で混乱し、行動出来なかった。

今も、目の前で相川を襲いかかった少女に対処すべきか、階段を駆

け上がる幼い子を追うべきか判断出来ないうでいた。

相川はそれなりの運動神経を持った男子高校生だ。

目の前の少女に負けるとは考えにくい。

とはいえ、相川と襲撃してきた少女を放ってまで階段を駆け上がる少女の方を追う必要があるだろうか？

そんな中瀬の迷いに感づいたのか相川は中瀬に向かって指示を出した。

「とりあえず、ここにいて様子見を！」

おそらく、襲いかかって来た少女と優希と呼ばれた少女は協力関係にある。

鉄パイプを持った少女が襲いかかって来たのは優希と呼ばれた少女が二階へ上がる為の囹の可能性が高い。

つまり、少女が襲いかかって来たのは相川達に階段を昇る少女を追わせない為と考えられる。

このことを踏まえると余計な事はせず様子見がベストな選択肢だと相川は判断した。

現に、相川の目の前にいる少女は声を張り上げて以来、襲いかかって来る気配が無い。

このまま、優希と呼ばれた少女が階段を上り切ってしまえば目の前

の少女も相川達を無視して二階を目指すだろう。

優希がちょうど階段の半分くらいまで上がった時に、二階から文香の声が拳がった。

「幸貴くん、美那ちゃん！何かあったの！？」

声から、階段へ向かって走って来ていると判断出来た。

おそらく葉月も一緒だろう。

文香の声を聞くと鉄パイプを持った少女の顔色が変わった。

おそらく、待ち伏せは相川と中瀬の二人だけだと踏んでいたのだろう。

想定外の人間。

しかもおそらく階段に向かって来ている。

優希を無事に二階にたどり着かせようとしていた少女にとって最悪の状況だった。

何とかしなければならぬ。

相川を無視してとにかく階段へ向かおうか考えた。

だが、最悪の状況を打破したのは少女ではなく相川の拳げた声だった。

「階段から出来るだけ離れて下さい！」

二階にいる文香への指示だった。

正確には文香と一緒にいるであろう葉月への指示でもある。

ここで、文香達が下手に動けば戦闘になりかねない。

相川はそれだけは避けたかった。

そして相川の指示に文香と葉月は従ったのだろう。

優希は無事に階段を上り切り、鉄パイプを持つ少女へそのことを伝える声が二階から飛んできた。

声を受けた少女は相川に向かって鉄パイプを投げつけた。

相川がそれを捌く僅かな隙に少女は相川の横を駆け抜け、階段へ向かった。

そして、優希と呼ばれた少女とは比べ物にならないくらい身軽かつ素早く階段を駆け上がり、あっという間に姿が見えなくなった。

階段前のスペースには相川と中瀬だけが残された。

第六話 「二階」

葉月と文香は相川達が見張っている間、通路の床に座り休息をとっていた。

相川達が見張っている位置とは少し距離がある。

例によって、特にする事が無かったのでルールの確認や荷物の整理をしながら過ごしていた。

相川達が見張りを始めて二十分くらいが経ってからだった。

一階の方から何やら物音がした。

二人は少し不審に思い、階段の方を見た。

そこには一階を覗いてる相川と中瀬の姿がある筈だった。

しかしそこには二人の姿は無く、一階の方から再び聞こえてきたのは金属が打ち付けられるような音と人の声だった。

何かが起きている。

そう感じた二人は、急いで立ち上がり、階段へ向かって走り出した。

それと同時に、文香が声を挙げる。

「美那ちゃん、幸貴くん！何かあったの！？」

直ぐに一階の方から返事が返ってきた。

「階段から出来るだけ離れて下さい！」

相川の声だった。

その指示の意図するところは分からなかったが、二人はとりあえず階段へ向かっていた足を止めた。

すると階段から一人の少女が駆け出してきた。

少女は文香達とは別の方へ繋がる通路を走り抜けていった。

状況が掴み切れず、二人は互いに顔を見合せていると今度は先程とは別の少女が階段を駆け上がって来た。

そしてその少女の顔には二人とも見覚えがあった。

相川や中瀬と接触する前に遭遇し、情報を交換した後に別れた少女だ。

その少女は先ほど姿を消した少女と同じ方へ走って行き、姿が見えなくなった。

程なくして、一階から相川の声が飛んできた。

「もう階段に近付いても大丈夫です！」

声を受けて、葉月と文香は駆け出し、そのままの勢いで階段を下って行った。

相川を襲った少女が姿を消すと、直ぐに中瀬が相川に駆けよって来た。

「幸貴くん大丈夫!？」

鉄パイプで殴られた左肩の心配をしているのだろう。

「大丈夫、大したことないって」

相川は左肩を軽く二回ほど回して見せる。

肩の動きや表情に不自然さは見当たらない。

どうやら本当に大丈夫なようだ。

良かった、という中瀬の言葉。

それを掻き消してしまうかのように相川は二階に向けて声を挙げた。

「もう階段に近付いても大丈夫です!」

すると直ぐに葉月と文香が階段を駆け降りて来た。

階段を降りると、そのまま相川達に駆けよって来た。

「二人とも無事かい!？」

葉月は少し息を切らしながら、心配そうに尋ねた。

「大丈夫ですよ。一発だけ肩を叩かれましたけど大したことないです」

相川は中瀬の時にしたように、左肩を軽く回す。

「私も大丈夫です」

中瀬も答える。

「それで、一体何があつたの？」

文香の言葉を受けて、相川は表情を引き締め、事の経緯を説明し始めた。

説明は出来るだけ詳細に、相川の指示の意図なども触れながら進めた。

詳細には言っても、相川が襲われた瞬間は相川自身も無我夢中だったので細かく説明するのには限界があり、中瀬に何度か補足してもらった。

事の経緯を話し終えると、文香達の疑問も解けたようで、納得した様子を見せた。

「いやしかし、無事…とまではいなくても、大したことなく良かった」

葉月にとってはそれが何より大事らしかった。

明るくまとめようとする葉月に対し、文香は神妙な面持ちで呟いた。

「しかし、かりんちゃんの方から戦闘を仕掛けてくるとはね…」

「かりん？」

「ええ、幸貴くんや美那ちゃんにも一度話したでしょう？あなた達と会う前に私とおじ様が会った子よ。ルール教えた後、直ぐに別れたけど」

「そう言えばそんなこと言ってましたね」

「ええ。それにしても、いきなり襲ってくるなんて……」

予想外だ、と付け足しそうだった。

かりんは葉月と文香が信用出来ないと行って、二人との協力を拒んだが、文香には人を積極的に攻撃するような人間には見えなかった。

だから文香は少なからず戸惑っていた。

そんな文香をよそに、相川はスペースの端まで歩き、落ちていた鉄

パイプ左手で拾い上げる。

少女が彼に向かって投げつけた物だ。

相川は以前から使っていた右手の鉄パイプと左手の拾った鉄パイプを見比べながら、

「まあ、仕方ないでしょう。俺と中瀬さんが待ち伏せて他の参加者を襲撃しようとしている様に『優希』って子には見えた。その報告を受けた『かりん』って子は、仕方なく強行突破に乗り出したんでしょう」

言っと、相川は以前から使っていた方の鉄パイプをその場に落とした。

少女との戦闘で脆い部分を叩かれた所為で、変形し、今にも折れてしまいそうな状態だったのだ。

早い話が使い物にならない。

だから捨てたのだ。

幸い少女の使っていた鉄パイプはほとんど劣化していなかったのだから、こちらを使わせてもらうことにした。

文香は捨てられたパイプを見ながら口を開いた。

「まあ、そうとも考えられるわね」

「それはいいとして、そろそろ二階の探索をしてみませんか？」

「待ち伏せを止めるってこと？」

中瀬が意外そうに言う。

「うん。自分から待ち伏せを提案しといてアレなんだけど、いつまでも此処に留まっけていても仕方ない。もう一階には誰もいない可能性もあるし」

「相川くんの言う通り二階へ行くべきだと僕も思う。僕の解除条件に付き合わせてしまった所為で随分と遅れを取っているだろうしね。それにいつかは見切りをつけなきゃならない」

中瀬は相川と葉月の意見に納得したらしく、

「分かりました！行きましょう」

と駆け足気味で階段へ向かった。

三人もそれに続いた。

二階の探索も一階の時と同じように行われた。

チェックポイントの位置を知る葉月が先導し、部屋には積極的に入って調べる。

二階には何か一階とは違うものがあるかと期待していた一同だったが、ロクな物は見つからなかった。

そして、大した物を見つけられないまま、二階に来てから五つ目の部屋に入ろうとしていた。

その部屋は扉だけ見れば今まで見てきた部屋とまるで変わらなかった。

ただ、先頭を歩き続けていた葉月がドアに手を掛けた時に異変が起こった。

突然、彼らのPDAがアラームを鳴らし始めたのだ。

相川以外の三人は慌てて、PDAの画面を見る。

画面に表示されていたのは地図でも解除条件でも無く、簡潔なメッセージだった。

『あなたが入ろうとしているのは戦闘禁止エリアです。エリア内で戦闘を行うと首輪が作動します。充分に注意して下さい』

「戦闘禁止エリア？」

相川が中瀬のPDAを覗きながら口にした。

戦闘禁止エリア自体はルールにも書いてあったため、存在は知っていた。

けれど、実際に目の当たりにすると驚いてしまうものだ。

「とにかく、中に入ってみよう」

葉月が扉を開け、四人は部屋に入って行った。

部屋の内装は、今まで見てきた部屋の物とはかなり異なっていた。

広さは今までの倍以上、壁も無機質な灰色でなく、茶色をベースとした暖かい色だ。

外より一回り強い照明の明るさがそれをより印象的に演出し、部屋全体の雰囲気は部屋の外のそれとは丸つきり異なる物へと変貌させている。

床には絨毯が敷かれ、ソファや、テーブル、ベッド等の家具類も充実しており、窓が無いことを除けば此処が高級ホテルの一室として紹介されても誰も疑ったりはしないだろう。

完全に参加者の休憩の場として用意されており、四人も早速此処で休息を取ろうとした。

部屋のソファに腰掛けている男、先客が居なければ……。

男は遠目から見ても簡単に分かる程の長身で、がっしりとした体つきで、精悍な顔つきをしている。

歳は三十台半ばくらいだろうか。

男はこちらに気付き、ソファーから立ち上がり近づいてきた。

男も首輪をしている。

当然、ゲームの参加者だ。

相川が何かを言おうと思った矢先、男の方から声をかけてきた。

「そんなに警戒しなくても大丈夫だ。ここでは戦闘は禁止されている」

平和的な男の対応に四人の緊張はいくらか和らいだ。

「俺は情報交換がしたい。何せ、他のゲーム参加者に会うのはこれが初めてだからな」

言々と男は踵を返し、先ほどまで座っていたソファーの方へ引き返した。

そちらで話し合おうということだろう。

四人は男に続く。

相川は歩きながら、ある算段を立てる。

基本的に全ての参加者に言えるが、JOKERを持っている可能性、相川のPDAを奪った『犯人』である可能性がある。

この男も例外では無い。

ならば疑ってかかるのが定石だ。

仲間の三人をシロとするなら、クロに成り得る参加者は九人。

JOKERを持っている可能性、『犯人』である可能性、どちらもそれほど低くないのだ。

この話し合いで、この男に色々と仕掛けてみる必要がある。

もちろん、それにはリスクも伴うので慎重さが求められる。

故に相川は今までにない緊張を感じていた。

しかし、同時に気分が高揚してもいた。

JOKERや相川のPDAが入るかもしれないチャンスなのだ。

優希とかりんの時にそのチャンスは無かった。

もちろん、この男がJOKERも相川のPDAも持っていなければただの空振りだ。

それでもやるしかない。

（やってやる…。大丈夫、上手くやれる筈だ……）

第七話 「偽装」

男はつい先刻まで座っていたソファーに腰を落とす。

相川達は男と向かい合うように別のソファーに腰掛けることにした。

都合良く、四人がちょうど座れるくらいのスペースがあり、背の低いテーブルを挟んで男と向かい合いながら座る形となる。

ソファーの中央には相川と中瀬が、端には葉月と文香が座った。

相川は肩に掛けていたスクールバッグを膝くらいまでの高さしかない目の前のテーブルにのせた。

そして、軽く息を吐く。

空気と一緒に緊張と焦りが体から抜けていくことを願うように。

大丈夫だ、と自分に呼び掛けて気分を落ち着かせる。

（まずはこの人のPDAのルール欄を如何に自然に見るか、だ）

相川は『犯人』のPDAに載っているであろうルールは推測の域を出ないが、断定済みだ。

「情報交換、ですね？」

とりあえず、男に確認をとる。

「ああ、その前に名乗っておこうか。俺は高山……高山浩太だ」

「高山さん、ですか。俺は相川幸貴です」

「私は陸島文香よ」

「僕は葉月克己」

「中瀬美那です！」

次々と名乗る。

最後だけやけに声が大きかったが、それについては誰も言及しなかった。

「それで情報交換なんですが、まずはルール……ですよね？」

相川の駆け引きは既に始まっている。

体が緊張と興奮で支配され始めた。

「ああ、俺の知り得たルールは自分のPDAに記載されていた分だけだからな。ルールは是非とも教えて欲しいところだ」

「ルールはこれに全て書いてあります」

相川はテーブルに置かれたバッグから一枚のB5サイズの紙を取り出した。

ルールのメモだ。

ルールを把握していない参加者に渡す為に自分用とは別に事前に作っておいた物だ。

「全てのルールを把握済みか。しかし…」

「ええ。この紙を渡されても信用出来ませんよね。騙す為のウソが書いてあるかもしれない」

これは、誘導だ。

高山のPDAのルール欄を見る為の。

「そうだな。出来れば、PDAのルール欄を直接見せてもらいたい」
ルール欄。

相川の思惑通りに話が進み始めた。

「そうですね。そして、それはこちらも同じなんですよ」

「どういう意味だ？」

「俺達は全てのルールを把握していますが、四人のPDAで全てのルールが集まった訳ではありません。他の参加者から教えてもらったルールもあります。それも口頭で」

「なるほどな。つまり、そのルールに関してはPDAに記載されているのを見た訳では無いから真偽の確証が無い。俺のPDAのルール欄を見て、そのルールが載っていれば真偽がハッキリする」

無表情で返す高山。

「その通りです」

相川は冷静に返す裏で、興奮と若干の焦りを感じていた。

（よし、ここまでくれば後はもう……）

「となれば、お互いがルール欄を見せ合うべきか」

誘導は完璧だった。

この流れなら、高山自らPDAのルール欄を開示するだろう。

少し遠回りをしてルール欄を見ようとしたのは、PDAを見せ合うのをこちらから要求しなくなかったからである。

ルール欄を見せて貰うだけなら、ルールを全て把握仕切れていないので見せて欲しい、と頼めば充分ではある。

しかし、それでは自分達からルール欄の開示を要求し、それに高山が応える形になる。

高山が『犯人』だった場合、こちらが探りを入れている事に気付かれる可能性があるのだ。

だから、相川の方からルール欄の開示に話を持っていくのは避けたかった。

そして、高山の方からルール欄の開示を要求するような形にしたかったのだ。

こちらの疑いに気付かれない為に。

それに、高山が『犯人』でなくとも、高山の「相川達以外の参加者とはまだ接触していない」

というのが嘘だった場合は厄介だ。

嘘だとすると、文香達が戦闘禁止解除前に七人で行ったルール交換について知っている可能性が出てくる。

そうなると、ルールを全て把握仕切れていないという嘘が通用しないかもしれない。

だから、嘘をつかなくて済み、尚且つ高山に疑っていることを悟られずにルール欄を見る方法を選択した。

もちろん、敢えて疑っていることに気付かせて心理戦に持ち込む手段もある。

だが、まだその段階ではないと相川は判断した。

相川はとりあえずメモを高山に手渡す。

（それにしてもこの人、ポーカーフェイス、冷静沈着、おまけに理解力も高い。一番やりにくい相手だ）

高山は渡されたメモに軽く目を通してから、

「分かった。では俺のPDAのルール欄から見せよう」

その言葉で相川の緊張は一気に加速する。

（ルール欄にルール8とルール9が載ってたらほぼ確実にクロだ…）

血が普段より速く流れているような感じがした。

いや、相川だけでは無い。

中瀬や、葉月、文香も大きな緊張を感じていた。

今まで二人のやり取りに口を挟まなかったのは、必要を感じなかったからであり、相川の意図を理解していなかった訳ではない。

三人も高山のルール欄が大きな意味を持つのは分かっている。

相川のPDAを奪った『犯人』は誰とも接触しない内にルール8とルール9を知っていた筈だ。

だから『犯人』のPDAにはルール8とルール9が載っている、という相川の推理…。

あの時の推理は今の為にあつたのだと言える。

高山はポケットからPDAを取り出し、軽く操作してからこちらに画面を示してきた。

載っていたルールは、ルール1とルール2と……。

ルール8と……ルール5だった。

ルール8は載っているがルール9はない。

相川は内容に良く目を通す振りをする。

「なるほど、ルール8とルール5ですか。分かりました」

相川が言つと高山はPDAをズボンのポケットに仕舞った。

葉月、中瀬、文香の三人は高山に悟られない程度に肩の力を抜いた。

ルール9が載っていなかったのだから、自然なことではある。

しかし、相川は高山のPDAのルール欄を見ても一切気を抜かなかった。

まだ高山が『犯人』でないとは言えない。

『犯人』がJOKERを持っていれば、『犯人』がルール8とルール9の載っていないPDAを提示できる可能性もある。

つくづくJOKERは厄介な存在だ、そう思わざる得なかった。

一応、『犯人』は奪った相川のPDAのルール欄を見せることも出来るが、高山の出したPDAは相川のものではない。

スミスというガボチャが言うには、相川のPDAにはルール8は記載されていないのだから。

相川は「では」、と話を切り返す。

「今度はこちらがルール欄を見せる番ですね。」

相川は相手がJOKERを持っているパターンの『犯人』も想定している。

だからこそそのPDAのルール欄の開示だ。

相川がルール欄の開示に誘導したのは、高山のPDAの欄を確認するためだけが目的ではない。

むしろ、今となっては、こちらがPDAを開示することこそが本命だ。

（相手がJOKERを持っているかには関係なく、今度の仕掛けは『犯人』ならボ口を出す可能性がある）

もちろん、相川はPDAを持たないので、PDAの開示は他の三人に任せるしかないが、そんなことは三人も分かっている。

相川の言葉の直後に中瀬が制服からPDAを取り出す。

「ルール3とルール8が載ってます」と、ごく丁寧に宣言した後にPDAを差し出した。

画面には言葉の通りのルールが表示されていることだろう。

高山は示された画面を確認し、相川の渡したメモに視線を落とす。
メモに偽りが無いかチェックしているのだ。

「分かった。もう充分だ」

高山がそう言うと、中瀬はPDAを制服のポケットにしまい込む。

続いて、葉月がPDAを見せる。

こちらのPDAを見せると宣言した相川はPDAを提示する気配は無く、高山のやり取りをただ見るだけだ。

見せるPDAが無いので、当然と言えば、当然なのだが、事情を知らない人間が見れば不自然に映る。

何しろ、これまでは高山との交渉に積極的で、こちらのPDAを見せると言った張本人なのだ。

それがいざPDAの開示になるとPDAを用意する素振りすらしない。

確実に高山は怪しむだろう……………事情を知らなければ。

そう、つまり逆を言えば相川がPDAを持っていない、という事情を知っている『犯人』は何ら不思議に思わないのだ。

相川はPDAを持っていないのだからPDAを見せる素振りを見せないのは当然だ、と一人で解決し、その相川のPDAについての発

言は控える。

百パーセントではない。

高山が『犯人』であつても、あたかも、相川がPDAを持たない事実など知らない、といった対応をする可能性もある。

そうなれば、相川がPDAを見せる気が無いのを見た際に、高山は敢えて相川のPDAの開示を要求する。

しかし、そこまで頭が働く人間の方が少数だろうし、何より『犯人』は出来るだけ相川のPDAを話題に挙げたく無い筈だ。

犯行を疑われている犯人がわざわざその犯行についての話をしたがったりするだろうか？

だから、高山が『犯人』である場合は相川のPDAの見せようとしていない態度について特に言及しない可能性が高い。

高山が『犯人』でないならば相川のPDAについて言及する可能性が高い。

相川はそこを利用する。

見れば、高山にPDAを見せるのは三人目、文香の番になっていた。

相川は高山に対する注意と緊張を高めた。

（高山さんが文香さんのPDAを見た後…どう出るか）

高山の「もう結構だ」という言葉を受け、文香はPDAをしまった。

相川の体により一層強い緊張が走る。

（ここで、高山さんがどう対応するか）

自然と高山に対する注意も強くなる。

高山は相川の渡したメモに目を落としている。

（この後に、俺のPDAについて触れずに話題を変えるようなら……）

そして、高山が次に発した言葉は……………。

「相川、お前のPDAを見せてくれ」

相川のPDAについてだった。

「いえ、俺のPDAのルール欄に載っているのはルール4とルール8ですので見せる意味は無いでしょう」

ルール4は文香のPDAに、ルール8は高山のPDAに載っているのだ。

それにしても、高山のPDAのルール欄についても、今のやり取り

についても、高山が『犯人』であると判断出来る根拠は得られなかった。

（この人はほぼシロ、か？もう少しだけ、仕掛けてみるべきか？）

相川の葛藤とは反対に高山の態度は冷静そのものだった。

高山は相川に「そうか、分かった」と、返すと相川のメモを小さく畳んで仕舞った。

余りにも淡泊な対応なので、納得しているのかどうかも判断できない。

このやり取りで高山が真偽が確認出来なかったルールは一つ。

賞金に関するルール、ルール6だ。

これに至っては、相川のメモに書かれていただけでPDAに記載されているのを見た訳ではないので判断できない。

だが、それ以外のメモの内容は正しいものだと確認が取れているのでこのルールも十中八九、真実だと踏んでいた。

「ルール交換も終わった訳ですし、互いのこれまでの経過報告でもしますか」

相川の提案に高山は同意する。

「ああ。俺は他の人間と接触していないから、大した事は話せないと思うが」

「それはこちらも似たようなものです」

「そうか。では、俺から話すとするか」

相川と高山はこれまでの自分達が見てきた事を報告し合った。

高山は他の参加者と接触していないので、あまり有益な情報は無かった。

相川は自分のPDAが奪われた事については伏せておいたが、それ以外の事は隠さずに話した。

経過報告が終わると、相川から次の話を切り出した。

「では高山さん、俺達と協力しませんか？」

それは唐突な提案だった。

黙って考え込む高山を待たずに相川が付け加える。

「と言っても、互いの解除条件を知らずに協力するのは無理ですね。解除条件、教え合いませんか？」

高山は自分のPDAを取り出しながら、

「ああ。俺もお前達の解除条件次第では協力してもいいと考えている」

「じゃあ、まずは俺の解除条件から見せますよ」

相川はそう言うと、正面に置かれたスクールバッグに手を入れる。

もちろん、中にPDAなど入っていない。

これは演技だ。

相川は高山に悟られないように反応を窺う。

高山が相川はPDAを持たない事を知る『犯人』だとすれば、予想外な相川の行動に何らかの反応があってもおかしくは無い。

だが、相川の目にはいつも通り無表情な男の姿しか映らない。

（これは本当に俺のPDAの事は知らないか。いや、そもそもこの人に対して動揺を誘うことそのものが間違ってたか？）

相川はバッグを探る手をピタリと止め、思い付いたように言った。

「よく考えると、高山さんが俺達に提示出来る解除条件は一つだけですよね。ならば、協力を約束出来ない内にこちらが四人全員の解除条件を提示するのは不公平じゃないですか？」

実際は思い付きでは無く用意された台詞だった。

「ふむ、そういう考えもあるだろうな」

「だから、こちらの提示するPDAも高山さんが提示するPDAもまずは一つ。その後互いに協力するか判断する。協力を取り決めた後にこちらの残りの解除条件は徐々に教えます」

高山は少し考え込む様子を見せた後に返答した。

「分かった、それで良い。では、俺からPDAを明かそう」

高山は自分のPDAの画面を相川に向けてきた。

表示されていたのはスペードの2。

それに対して相川が何か言う前に、文香が自分のPDAの画面を高山に見せた。

「私のPDAは6番よ」

文香の解除条件は人に知られてもデメリットが少ない。

しかも、高山の解除条件と相性が良い。

だからこそ、率先して解除条件を明かしたのだろう。

高山は文香のPDAを見ると、僅かに表情を緩ませた。

「どうやら、相性の良い解除条件らしいな」

高山はPDAを仕舞いながら話を続けた。

「6と2、どちらもJOKERが必要な解除条件で相性は良い。俺は協力可能だとは思うが…どうだ？」

四人全員が首を縦に振る。

「だが協力可能とは言っても、俺は完全にはお前らを信用出来ない。それはお前達も同じだろう。だから俺は部分的協力を提案する」

「部分的とは？」

「これを使う。二階の部屋で手に入れた物だ」

高山は胸ポケットからマッチ箱くらいのプラスチック製の箱を二つ取り出した。

「何ですか、それは」

「こいつをPDAに近づければ分かる」

言って、二つの内の一つを相川に渡した。

相川はちょうどPDAを持つ文香に渡した。

すると、文香のPDAからアラームが鳴り始めた。

例によって画面の表示に変化があった。

画面には長々とプラスチック製の箱についての説明が表示されていた。

『このツールボックスをPDAの側面のコネクターに接触することで、PDAに新たな機能をもったソフトウェアを組み込み、カスタマイズすることが可能です』

『ソフトウェアを組み込めば他のプレイヤーに対して大きなアドバンテージとなりますが、強力なソフトウェアは起動するてバッテリー消費が早まるように設定されています』

『使いすぎてPDAが起動できなくなり、首輪を解除できなくなる事がないように注意しましょう。なお、一つのツールボックスでインストール可能なPDAは一台のみです』

『どのPDAにインストールするかは慎重に選びましょう』

相川は文香の画面を覗き、内容を確認した。

最後まで目を通すと、真横に向けられていた視線を戻し、高山に尋ねた。

「なるほど、便利な物みたいですが、どうしてこれを俺達に？」

「このツールボックスは少々特殊だな。二人以上で用いなければ意味が無い」

高山はツールボックスを自分のPDAにコネクトした。

「こうすれば、ツールボックスの機能が表示される」

文香は高山に習い、ツールボックスをコネクトした。

「彼女のPDAにも表示されているだろうが、このソフトウェアはインストールされた二台のPDAで通話を可能にする物だ」

「ええ。そうみたいね」

文香は画面を見たまま頷く。

「これを互いにインストールすることで、部分的協力をするってことですか」

「そうだ。俺もお前達もJOKERのPDAが欲しい。だから俺とお前達は行動を共にはしないが、どちらかがJOKERを見つけたら連絡する。探すだけなら別れた方が効率も良い。もちろん、俺はJOKERを見つけても破壊せずに連絡しよう。JOKER関連でなくとも何かあれば連絡する方針で構わない」

「分かりました、それで行きましょう。ただし、一緒に行動しない内は俺達の解除条件を明かすことは出来ませんよ？ソフトウェアを使って口頭で教えても意味はありませんし。完全には信用出来ない今の段階で残りの解除条件は教えられませんしね」

「ああ、それでも構わない」

「そうですか。それじゃあ、問題はこちらが誰のPDAにインストールするか、ですね」

一応ツールボックスには、バッテリー消費というリスクもある。

「私はどのPDAでも問題は無いと思うけど……」

文香は言いながらツールボックスをPDAから取り外した。

「美那ちゃんがさっきからやってみたいオーラを出しまくってるのよね」

文香は笑みを浮かべて、ツールボックスを中瀬に渡した。

実際は、中瀬は特別な振る舞いはしていなかった。

ただ、ゲーム終盤まで持つ必要のある中瀬のPDAが適任と判断しただけだ。

「えっと、ここを接続すれば良いんですけどっけ」

中瀬はPDAを受け取ると戸惑いながらもツールボックスをPDAに接続する。

「ああ。その後に『インストール』という表示を選択すればインストールが開始されるらしい」

高山はPDAを操作し、インストールを開始した。

中瀬も高山に続いた。

インストールは三十秒ほどで完了した。

「念のため、試運転をしておくか」

「はい、分かりました」

中瀬はソファから立ち上がり、高山達と少し距離を取った。

そして、ソフトウェアの機能で高山のPDAにコールする。

コールを受けた高山がPDAのボタンに触れ、互いのPDAが通話状態になった。

「聞こえるか」と高山がPDAに向かって呟くと、『バツチリです』という中瀬の声がPDAのスピーカーから返ってきた。

高山はそれを確認すると、立ち上がった。

「俺はそろそろ行く。休息は充分に取ったからな」

「分かりました。JOKERを見つけたり、何かあったら連絡します」

「ああ。俺も何かあれば彼女のPDAに連絡する」

言っと、高山は部屋から出ていった。

高山が閉めたドアの音。

数秒の沈黙。

そして、部屋に残された四人はため息を吐き、力を抜いた。

「緊張した〜」

中瀬が最初に声を挙げた。

「でも、相川くんの『PDA』を奪った犯人では無さそうだし、協力できそうだし良い人と会えたと思は思う」

「そうね。それに、解除条件の相性も良い」

そんなやり取りを見て相川は考え込むように言った。

「俺はそこまで樂觀しない方が良いと思います」

「どういう意味だい？」

「高山さんの見せた2のPDAはJOKERで、『犯人』である可能性も充分にある。信用するのは早いんじゃないかって話です」

「確かに、幸貴くんの言うことも否定出来ないわね。それにもし高山さんがJOKERを私達に見せていたとしたら、高山さんは相当厄介な敵となる。何せ、偽装したJOKERを見せるというリスクのある選択をしながらも、表情一つ変えなかったのだから」

「その『リスク』とやらを高山さんが負ったかは分かりませんがね」

「偽装したJOKERを出すのはリスクがあるでしょう？JOKERで騙そうとした事がバレると不味くないかしら」

文香の言う通り、偽装したJOKERの提示はそれなりにリスクがある。

偽装が見抜かれない保証は無いのだから、JOKERを出すよりは

PDAの提示そのものを避ける方がベターな場合もあるだろう。

しかし、相川の返答はそんな一般論を簡単に否定するものだった。

「それが案外そうでも無いんです。少なくとも、高山さんが『犯人』だった場合は偽装したJOKERをノーリスクで見せられます」

第八話 「JOKERの性質」

ノーリスク…。

それは、JOKERを自分のPDAとして提示するにはそれ相応の危険が伴うという前提を覆す。

何やら大事な話になっている、そう感じた中瀬は相川達の元へ戻り、高山が腰を下ろしていた方のソファに座った。

「ノーリスクでJOKERを出せるというのはJOKERの偽装が絶対にバレない方法があるということよね？」

「そうなります」

「JOKERを見せる相手の首輪の解除条件を知らずとも？」

「知らずとも、です」

普通に考えれば、ノーリスクで偽装済みのJOKERを提示することはできない。

JOKERを使って騙そうとすることを見抜かれ、信用を失う恐れがある。

それは、文香だけでなく、中瀬と葉月も考えていた事だ。

「想像がつかないわ。説明してもらえないかしら」

「いいですよ」

あっさりと了承した。

文香と葉月は半信半疑。

反対に、中瀬は期待の眼差しを相川に向ける。

「でも、リスク無しでJOKERを提示する方法の前に、俺が高山さんのPDAはJOKERではないかと警戒する理由から話します」

「理由も何も、JOKERでないと証明出来ないからだろう？」

「それだけじゃないんですよ、葉月さん。まず、JOKERの偽装について少し考えてみましょう。JOKERを使って相手を騙し、共闘関係を築くには何のPDAに偽装させるのが一番良いのか」

「まずA、3、9に偽装はしないだろう。そんな解除条件を見せられても騙されるどころか、かえって警戒する」

「そうですね。JOKERだとバレなくても信用されない解除条件では意味がない」

「その点では、10や8に偽装するってことも考えにくいわね」

「10や8も偽装には向かない番号ですが、俺はKや4、5の方が向いてないと思います」

「どうして？」

「考えて下さい。仮にKに偽装し、それを自分の解除条件と偽り、仲間に取り入るとする。でも、あっさりPDAが五台以上集まったりしたら、さあ大変。解除条件は満たしたのだから首輪を解除してみろって流れになりますよね。当然、首輪は解除できないからJOKERを使っていた事が見抜かれる」

「なるほど…」

「4でも同じ事が言えますし、5のPDAに偽装して仲間になっても、嘘の解除条件の所為で不必要な移動を強えられる。これは7も同じですね」

「となると、かなり限られるわね」

「はい。今挙がったのを除くと2、6、J、Qですね。JとQは解除条件の為に特別な負担が強いられないしゲーム終了間近まで解除条件を満たさないという保証がある。2、6は解除条件が負担を強いる可能性はあるが、条件を満たすことは決してない」

2、6はJOKERが必要なのでJOKERが二台以上ない限りは解除条件は達成されない。

「さて、この4つなら皆さんは何に偽装します?」

相川が軽く笑みを浮かべながら言う。

「この4つならどれでも同じじゃないかしら?」

「そんなことはありませんよ。結論から言うと、2に偽装するのが一番良い。だから高山さんのPDAがJOKERでは、と疑ったん

です」

「2が一番良いとする理由は何かしら？」

「2に偽装すれば偽装がバレにくい。それだけです」

「偽装がバレにくい？」

「ええ。そもそも、JOKERの偽装がバレるのには三つのパターンがあります。一つはさつき話した通り、嘘の解除条件を達成してしまう場合です。これは2、6、J、Qにはあまり関係ありません。二つ目はJOKERの番号が見せる相手のPDAの物と重複した場合。そして、最後に2の特殊効果で偽装が解除される場合です」

相川が言い終わると文香が何かに気付いたように、あっ、と呟いた。

そんな文香の様子に気付いた中瀬が尋ねる。

「どうしました？」

「分かったわ。2は他の番号より偽装に気付かれにくい理由が」

「分かったんですか！？私はサッパリなんですけど」

「僕も今の説明じゃ、良く分からないなあ……」

分かる組と分からない組で半分に割れた。

「考えてみれば簡単な話なんですよ」

相川が言う。

「例えば、Jに偽装したJOKERを見せる場合は相手が2かJかのどちらかのPDAを持つていただけで偽装が見抜かれる。対して2に偽装した場合は相手が2のPDAを持たない限りは偽装を見破られない」

そう、2に偽装した場合のみ、番号が重複するのと、特殊機能により偽装が強制解除されるのは同時に起こるのだ。

説明に対し、中瀬と葉月が先ほどの文香と同じような反応をとる。

「だから、2は偽装が見抜かれにくく、JOKERは2に偽装するのがベストなんですよ」

「それで高山さんの出したPDAはJOKERかもしれない、という訳かい」

「そういうことです。もちろん、本物の2である可能性も同じくらいあると思います」

「確かに、JOKERは2に偽装すればローリスクで済む。でもノーリスクでは無いわ」

「ええ、ただ単に見せるだけではノーリスクとは行きませんね」

相川は簡単に答えた後、そう言えば、と思い付いたように中瀬に話を振る。

「前に俺は言ったよね。2の特殊効果も良い事ばかりじゃないって

さ」

「そうだったけ？」

「ほら、文香さん達が見張りしている間にさ」

中瀬は「ああ！」、と感嘆の声を挙げる。

「そう言えば、そんな事も言ってたね！それで、それが今の話に係あるの？」

「もちろん関係ある」

得意げに返す。

「2の特殊効果によるデメリットは二つ。一つはJOKERの偽装に適しているという反面、本物の2を提示してもJOKERでないと疑われ易いという点。もう一つは自分の意思で、特殊効果を使用できないという点」

「自分の意思で、特殊効果を使えないのが……デメリット？」

「そう。自分の意思で使用不可能な所為で2の偽装解除の効果は、JOKERを見つけるという特性よりもJOKERを持つ参加者に自分が2を持っていることを教えてしまうという面の方が強くなっている」

「なるほど」、「確かに」と文香と葉月は納得してみせるが……。

「えっと、どういふ……こと？」

中瀬は理解仕切れていないらしい。

「ごめん、説明の仕方が悪かった」

相川は軽く笑いながら詫びた。

「簡単に言うとき、2のPDAって所有者の意思に関係なく半径1m以内のJOKERの偽装を解除する訳。だから、JOKERの所有者と2のPDAの所有者が接触した時、JOKERの所有者は偽装させたJOKERを定期的にチェックし、偽装の解除を確認すれば誰が2を持つてるか分かる。ところが、2のPDAの所有者はJOKERの存在には中々気付けない。これが2のPDAの特殊効果のデメリット」

「な、なるほど」

「しかしどうして、この事が高山さんがJOKERをノーリスクで提示する方法に繋がるんだい」

葉月が尋ねる。

「さっきの考えを少し応用すると、JOKERを使って2のPDAが近くに有る事が分かるだけでなく、2が近くに無いことも確認可能ですよね」

「確かにそうだけど、2の特殊機能の有効範囲である半径1m以内に近付く必要があるわね」

「その点は大丈夫でしょう。俺達と高山さんは互いにPDAを見せ

合った。偽装解除の有効範囲には充分入っていたハズです。そして有効範囲に入っていた確信があるならあとは偽装したJOKERを確認し、俺達が2のPDAの所有者でないことを確かめた上で2に偽装したJOKERのPDAを提示出来る」

「なるほど。それなら番号の重複も特殊機能の偽装解除も心配する必要がない。つまり偽装が見破られることはない」

文香は言いながら頷く。

それとは対照的に、葉月が疑問を投げ掛けた。

「しかし、高山さんは相川くんのPDAを見ていない。ということは、自分のPDAが相川くんのPDAの半径1m以内に入っていたかは分からない。これではノーリスクとはいかないんじゃないか？」

「ええ。だから最初に言っただけです。高山さんが『犯人』ならノーリスクでJOKERを提示する方法が存在する、と」

高山が『犯人』ならば、相川のPDAを持っているのは高山自身だ。

相川のPDAを見ていないから、とはならない。

「なるほど。確かにその通りだ」

葉月が納得してみせる。

と、中瀬がやや頭を悩ませながら確認する。

「えーと…。つまり、まとめるとこういうことかな？高山さんが『

犯人』なら幸貴くんのPDAを持ってるから警戒するのは三人のPDAだけ。ルール欄を見せ合った時にJOKERの偽装を確認して三人のPDAに2が無いことを確認する。その後2に偽装したJOKERを出しても偽装はバレない」

「そういうこと」

相川が調子良く答える。

百点満点、と付け足そうかとも思ったが調子に乗りそうなので止めておいた。

「しっかしまあ、よくここまで考えられるわね」

文香は感心を通り越してやや呆れ気味だった。

以前の『犯人』のPDAのルールの特定や、今回のJOKERに対しての考え方。

果たして彼と同じレベルで物事を考えられる参加者が他にいるだろうか。

少なくとも自分には無理だ。

文香はそう感じていた。

「幸貴くんは昔から頭が良かったよね」

「頭が良い、悪いというより要は良く考えるか考えないかの差だと思っただけだな」

「いやいや、それを踏まえても大した物だと僕は思うよ」

「まあとにかく、このゲームは良く考えなきゃ生き残れないと思います。特にPDAを持たない俺の場合は」

言葉の最後の方は自然と自嘲気味になった。

「確かに良く考えなきゃ生き残れないでしょうね。でも、他にもやらなきゃ生き残れない事があるわよ？」

「何ですか、それは」

「食事よ、食事。人間は食べなきゃ生きて行けない。休息や水分は少し取ったけれどゲーム開始から今までまともに食べてないでしょう？幸いこの部屋は戦闘禁止でキッチンもあるし今から食事にしない？」

「そうですね。食べられる時に食べておきましょう」

「じゃあ決まりね」

言つと文香は食材の入った荷物を抱えて部屋の隅にあるキッチンの方へ向かった。

「あつ、私も手伝います」

中瀬が文香を追う。

ソファーには葉月と相川が残された。

同時刻。

館内のとある一室でPDAを操作する一人の女性の姿があった。

スーツを着こなし、品のあるその風貌はこの飾り気の無い建物には些か不釣り合いに感じられる。

PDAの操作が上手く行かないのか、もしくは自分にとって都合の悪い情報が表示されているのか、彼女の表情はやや険しかった。

視線はPDAの画面を捉え続けている。

イラだったようにハイヒールの爪先で地面を叩く。

何かを待っているのかもしれない。

カツカツという気味の良い音が部屋に響く。

彼女が諦めた様に息を吐き、PDAに指を伸ばそうとした時、PDAのスピーカーから声が飛んできた。

『すみません、郷田さん。お待たせしてしまってます』

声は若い男の物だった。

「どうなってるの！？ゲーム開始から全く連絡が取れないなんて！」

今までの不満を爆発させるように声を荒げた。

『すいません。色々トラブルが重なりまして』

「そのトラブルの所為で配られるPDAにミスがあった訳ね？本来なら私は5のPDAだった筈なのに。お陰で私もゲームクリアに少々手間取りそうだわ」

『申し訳ありません』

「それと、5のPDAに付いてるゲームマスター専用の特殊機能はストップさせているんでしょうね！？」

『それは勿論…』

「…ならいいわ」

『しかし、郷田さんが非常用のパスワードを覚えていて助かりましたよ。それを覚えていなければ、今私と通信しているそれもただのPDAだった』

「ゲームマスターが専用のPDA以外でもその権限の使用を可能にする為のパスワード……ね。使ったのは今回が初めてだわ。と言うより、ルール4のパスワード自体、入力するのは初めてよ」

『そうでしょうね。JOKERを持たなければ意味の無い物ですか』

「それで、トラブルっていうのは何かしら？」

『ええ。実は参加メンバーに若干ながら急遽変更がありましたね。その所為でPDAの配布にミスがあつたみたいです』

「参加者に変更？これまで私が接触した六人は予定通りの人間だったと思うんだけどね」

『郷田さんはまだ接触していませんね。今回、急遽不参加になったのは御剣総一と姫萩咲実の二名です』

「変更の理由は何？」

『参加予定の御剣総一が家から中々出なくなりましてね。一時的な引きこもりとも言うんでしょうか。とにかく無理やり連れ込むのは無理があると判断しまして、御剣の参加は見送られました。当然、姫萩は御剣が居てこそ価値のある参加者なので同様に参加が見送られました』

「その二人の代わりは？」

『相川幸貴と中瀬美那。二人とも高校生です』

「別に高校生に拘る必要は無いと思うんだけどねえ」

『詳しいデータは後でPDAに送ります。実際に各参加者に配られたPDAの一覧も載せときますよ』

「お願いするわ。それで今のところの状況はどんな感じかしら？」

『参加者は十三名全員が生存してますね。参加者のほとんどが二階にいます。今までこれと言った大きな戦闘は起きてませんが、少々厄介と言つか、面白い事になってますよ』

「面白い事？」

『はい。実は比較的早く目を覚ました参加者がまだ目を覚まさしていない他の参加者のPDAを奪うという事がありましたね』

「あら、珍しいことが起こったものね」

感心したような、馬鹿にしたような、どちらとも言える口振りだ。

『それが原因で相川幸貴はPDAを所持していません。しかし、この相川つてのが中々面白い少年でしてね。PDAを奪った犯人を自分なりに推理して見つけるつもりらしいんですよ』

「PDAを奪った人間を見つける、ねえ……。かなり厳しいと思うのだけれど」

『ところが彼の推理が中々面白い。ルール欄や、JOKERの性質を巧みに利用した推理なんですがね……。まあ、詳しい事は後でまとめてPDAに送ります』

「そうして頂戴。それにしてもPDA無しでゲームスタートだなんて厄介ね。しかも中途半端に推理なんてするからエクストラゲームを与えてもらえない」

『まあ、相川以上に厄介な状況の参加者もいますしね』

「あら、そうなの？」

『まあ、詳しい事は後で確認して下さい』

「そう言えば、B E Tの方はどうかしら？」

『一番人気は相川ですね。彼が自分のP D Aを見つけることが出来るかどうかの賭けだけでも相当盛り上がってますよ。他に人気なのは高山浩太、手塚義光の二人ですかね』

「じゃあ、その辺りの誰かにサブマスターを付けさせて頂戴」

『それは彼女も承知しています』

「そう。なら良いのだけれど。」

『しかし、今回のゲームは中々面白い事になりそうですよ』

「面白く『する』のが私達の仕事でしょうが。それに今のところは膠着状態。」

見てて面白いのは相川って子がP D Aを盗られたことだけでしょ？
」

『そうだとも言えますし、そうでないとも言えますね。相川がP D Aを盗られた以外にも面白い事が起こっている、と言っておきましよう。まあ、詳しい事は…』

「後で送る、でしょう？」

『はい』

「それじゃあ、もう切るわよ」

『分かりました。データは出来るだけ早く送りますが、送るのは十分後くらいになると思います。何せ情報が多くてまとめるのに時間が掛かりますからね』

郷田と呼ばれた女性は、分かったわ、と返事をして通信を切った。

「さて、やることが色々と出てきたわね」

彼女は部屋を後にした。

第九話 「統率者」(前書き)

状況を整理するために所有が明かされたPDAのまとめを前書きに書いておこうと思います

相川幸貴…(無し)

中瀬美那…(Q)

葉月克己…(5)

陸島文香…(6)

高山浩太…(2)

その他不明

JOKERなどの可能性は考慮せず、所有が明らかになったPD
Aの番号です

第九話 「統率者」

相川達は高山と話した時と同じようにソファーに腰を掛け、文香と中瀬で用意した食膳を乗せたテーブルを囲っていた。

「そう言えば中瀬さんが俺と会う前に見た人って高山さんだったの？」

食事中、相川が思い付いたように尋ねた。

「あ、言い忘れてたね、そういえば。遠目だったから絶対じゃないけど、多分高山さんで間違いないと思うよ」

「やっぱり、そうか」

中瀬の言っていた男の容貌と高山とが余りに一致する点が多かったから勘づいてはいた。

「直接聞いてみる？」

中瀬は食器を置き、笑顔でPDAを耳元に当てる。

確かに中瀬のPDAは高山のPDAと通信できるが…。

「止めときなさい、美那ちゃん。PDAは玩具じゃないし、バッテリーの制限もあるんだから」

文香が中瀬の悪ふざけを窘める。

中瀬はすまそうに笑う。

「はは、すいません」

中瀬はPDAを仕舞い、皿に手を伸ばす。

「でも、これでまだ一度も会えてない人は一人だけになったわけだ」

葉月が言った。

「え？そうでしたっけ？」

中瀬が首を傾げる。

「いや、僕と文香君は、という話さ」

「そういえば、そうなるわね」

文香が記憶をたどりながら指折りをする。

「残り一人、どんな奴でしょうね」

「小学生くらいの女の子もいたくらいだし、呆け老人がいたって私は驚かないわよ」

「呆け老人……ですか」

「ま、流石に無いでしょうけどね」

文香は肩をすくめて苦笑する。

「そうですよね……」

この人はどこまで冗談か分からないからな、などと相川は考える。

そんな平和な思考を切って落とすかのように。

「話は変わるけど……」

文香は苦笑いを作っていた顔を真剣なものに変える。

そして視線の先に相川を捉え続けたまま、言う。

「幸貴くん、あなた随分頭が回るみたいだけど、自覚はある？」

「え？ いや、さっきも言いましたけど、頭の良し悪しじゃなく、良く考えるかどうか……」

「それは分かるわ」

言い終わる前に文香が遮る。

「考えるか考えないかが重要なのは分かる。コンピューターだって起動させなきゃただの箱。でもね、そういう話をしているんじゃないわ」

文香は手に持つ食器を置き、スプーンと皿が短い金属音を奏でた。

「言うならば、そのコンピューターの性能が違うのよ、あなたと普通の人では。自覚があるでしょ？」

「まあ、自分は頭が悪いとは思ってないですけど…。それでも文香さんが言うほど大したものじゃないですよ」

幾らかばつが悪そうに答える。

「確かに、あなたの言う通りそんな大袈裟なものではないかもしれない。でも、少なくとも、たかが13人ぼっちしかないゲーム内なら貴方より頭の回る人間はほぼいない。私はそう確信してるわ」

「そうだと、いいんですけどね……」

相川は一人言のように呟いた。

自覚が無い訳では無い。

頭の回転には多少の自信がある。

そうでなければ、高山の時に率先して交渉しようとはしなかっただろう。

しかし、だからと言ってこのゲームで一番だとは考えていなかった。

文香とのやり取りは謙遜の意味も強いが、それ以上にこのゲームにはとんでもない奴が潜んでいるかもしれないという不安があった。

こんなふざけたゲームに選ばられるくらいだ、頭の出来が凡人のそれとは全く違うような天才だっているかもしれない。

もし、そんなのが居たら当然、凡人の中で少しばかり優秀である程度の相川では太刀打ち出来ないだろう。

だから、態度だけでなく心構えとしても謙虚に行こうと相川は考えていたのだ。

「ま、私が言いたいのは幸貴君がどれだけ頭が良いかって話じゃないんだけどね」

文香は表情を崩し、相川に笑い掛ける。

「じゃあ、どういう話なんですか？」

「少なくとも、この四人の中では幸貴君が一番、つてことが重要なよ」

「四人で一番、ですか」

「謙遜しなくとも良いわよ、事実な訳だし」

相川が何か返そうとする前に文香は続けた。

「だから、貴方にこのチームのリーダーをやってもらいたいのよ」

「リーダー、ですか」

柄じゃない、と相川は思う。

「適任じゃないかしら？あなたは一番優れた作戦を立てられる人間よ。そんなに責任感を感じる必要もないわ、参謀的なポジションと

考えても良いかもしれない。まあ、あなたの場合は自分の事で精一杯かもしれないけれど」

「まあ、皆がそれで良いって言うなら俺はそれで良いですけど」

文香は葉月と中瀬の方を向く。

「二人はどう思う？」

すると、直ぐに同意が返ってきた。

「私はそれで良いと、思いますよ。幸貴君がリーダーで」

「僕も賛成だなあ」

文香はそれを受けて、満足そうに相川の方に向き直る。

「と、言う訳よ」

相川は一拍間を置いて、返事をした。

「分かりました。やります、どこまでの事が出来るかは分かりませんが」

相川は中学の部活でも丁度こんな感じで部長になったな、などと思いつく。

「そう言ってくれると助かるわ」

「でも具体的に何をやらねばいいんですかね？」

「そうね、やっぱり行動の方針を決めたり、高山さんの時みたいに積極的に交渉するとかじゃないかしら」

「なるほど、分かりました。交渉と言えば文香さん、高山さんの時にPDAの番号を開示してくれたのは助かりました」

「ああ、アレね。あの場合は私が出すのがベストだと思ったのよ。出過ぎた真似だったかしら？」

「いいえ、そんなことはありませんよ。あの場合はアレがベストでしょう」

そうそう、と話を中瀬に振る。

「中瀬さんも、ルール欄の開示の時は率先してくれて助かった」

「うん。あれで良かった……よね？」

「もちろん。……っと、そうだ、まだ言わなきゃいけないことがあるんだった。首輪の解除条件なんだけど、中瀬さんは極力開かさない方が良い」

「Aの人に狙われるからってこと？」

「そこまで単純な話だけじゃないかも知れないけど、とにかく極力開かさないように」

「うん、分かった」

「それとは逆に、文香さんは解除条件を明かすことに消極的にならなくても良いかも知れませんか」

「そうね、明かすことでJORKERの持ち主が交渉を持ち掛けてくるかもしれないしね」

2や6のPDAは解除条件を明かすことでのメリットが期待できる数少ないPDAだろう。

「葉月さんは5のPDAだからどちらとも言えないんですが、明かすのは何時でも出来るので慎重に、くらいしか言うことないですね」

「ああ、分かった、そうするよ」

「早くもリーダーっぽくなってきたわね」

文香が笑顔を作る。

「そうですか？そこまで自信は無いんですが」

「貴方は頭が良い。自信を持ちなさい」

「そうだよ、幸貴くん。中学の時だって成績凄かったじゃん」

中瀬が励ますように言う。

「そりゃ、そうでしょうね」

文香は納得したように頷いた。

すると、何故か中瀬が文香と葉月に対して、相川が中学の時に如何に凄かったかを自慢気に語り出した。

「幸貴君は中学の時から……………」

相川は意識的に聞かないようにし、空になった皿をテーブルの隅に寄せた。

ここに来る前からの荷物の中に、役に立ちそうな物は無いかと、スクールバッグを漁る。

セロハンテープ。

一階で紙を扉に張り付けするのに使ったが、他にも役に立つかも、と考えてると、中瀬の話が耳に入る。

どうやら、相川はかなりのインテリキャラに仕立て上げられているらしい。

これでは、歴史科目は壊滅的に苦手だという話は出来なくなったなと思った。

先日に行われた学校の定期試験の日本史。

自信を持って書けた解答は『北条時政』だけだったなんて自虐ネタは口が裂けても言えそうにない、そう思うのだった。

それは相川達が食事と休息を終え、戦闘禁止エリアを出て5分も経たない内の事だった。

葉月と文香が出会えてない最後の一人、女性が相川達の前を歩くのが見えた。

距離は30mくらいだ。

女性はフリルの付いた黒い服を着ていた。

ゴスロリ装束というやつだろうか。

先頭を歩き、最初に彼女の姿を見付けた葉月が後ろの三人に静かな声で呼び掛けた時、彼女がこちらに気付いた。

あちらは女性で、見れば武器無しの丸腰。

こちらは武器を持った男二人と女性二人の計四人なので襲われるような心配はほとんどいらないと言って良いだろうが、全く警戒するなというのも無理な話だろう。

自然と武器を持つ手に力が入る相川と葉月だったが、そんな二人の緊張が馬鹿馬鹿しく思えてしまうほど気の抜けた声が飛んできた。

「すいませ〜ん。ちょっとお聞きしたいんですが〜」

妙に間延びした声と共に女性がこちらに駆け寄って来る。

その様子はまるで人に道を尋ねようとしているかのようにも映る。

そんな緊張感の無い女性の対応に相川達はすっかり警戒心を解いてしまった。

女性は相川達に近付くと、先ほどと同じ調子で尋ねた。

「すいませ〜ん。ここは一体どこなんでしょうか〜」

相川の第一印象は、ふざけた格好に緊張感の無い口調で、間抜けな質問をする女性だな、だった。

もちろん、声にも顔にも出さずに対応する。

「えっと、状況が全然掴めてないんですか？」

相川は一步前に出て、先頭に立つ葉月と並ぶ。

「はい〜。何だか、気付いたらこの建物に居たんですよ〜」

（何だか知らないがこの人の喋り方は聞いててストレスが溜まるな
…）

だからと言って相川が対話を止める訳にはいかない。

交渉は彼の役割なのだ。

「俺達も知らない間にここに連れられたみたいなんですよ」

「そうなんですか。どうしてこんな所に連れて来られたんでしょうね。」

（ここまで何も知らないとなると、今まで誰とも接触していないんだろうな…）

「『ゲーム』の為、らしいですよ」

「ゲームですか。ゲームだったら得意ですよ」

そう言って両手を胸元に持って行き、両方の親指を忙しく動かす。

（疲れるな、この人の相手は。文香さんの言っただけ老人説もあるが間違いとは言えないな…）

「いや、そういう類いのゲームじゃなくてですね…。…とりあえず、PDA持ってますか？」

「ぴーでいーえー、ですか？」

「このことなんだが」

機転を利かせて葉月がPDAを見せる。

彼女は葉月のPDAを見ると、何かを思い出したように両手を叩いた。

「もしかして、これですか？」

言つと服のポケットからPDAを取り出した。

「それで間違いありません。ちょっと見せて貰つて良いですか？」

「いいですよ」

即答だつた。

相川は彼女からPDAを受け取り、しっかりと握つた。

（まさか、ここまで簡単に行くとはな…）

「もしかして、この機械でゲームをするんですか」という間抜けな質問に適当に答えながら、PDAを操作する。

そして、解除条件の欄を表示させた。

表示されていたのはjackのカード。

解除条件は、『自分と24時間以上行動を共にした者が開始から71時間の時点で生存していること』というものだ。

続いて、ルール欄も表示する。

表示されたルールはルール1、2、5、7。

『犯人』の持つPDAの条件には当てはまらない。

相川はすぐに画面を切り替え地図を表示させて、PDAを手渡す。

それはまるで、地図の為にしかPDAを操作してないかのような手際の良さだった。

彼女は相川がルール欄と解除条件の画面を見たことにはおそらく気付いていないだろう。

「これがこの建物の地図になってます。この建物は六階まであって、ここは二階。現在地は、ええと、ここですね」

相川は人差し指を使って彼女のPDAの地図に直接現在地を指し示す。

「そうなんですか。広い建物なんですね」

地図を見ながら感心する。

「ゲームの詳しいルールを話そうと思うんですけど……」

相川はこんな通路のど真ん中で、長話というのも良くないな、と考えていると、少し前に話すのに丁度良さそうな部屋があることを思い出した。

「とりあえず、詳しい事を話すのは落ち着ける所に行ってからにしましょう」

部屋を目指して少し引き返すことにした。

落ち着ける部屋と言っても、段ボールしか物が無いという奇妙な部屋だった。通路の真ん中よりは幾らかマシだった。

部屋に入ると、とりあえず簡単な自己紹介から始めた。

それによると女性の名前は綺堂渚^{きどうなぎさ}というらしい。

相川は渚にルールを説明するのは勘弁して欲しいらしく、文香に後のことを任せ、部屋の隅で壁に寄りかかりながら渚達の話を聞いていた。

（それにしても、jackのPDA…か）

ルール欄のことを考えるとアレが『犯人』に配られたPDAではないだろうが相川本人のPDAであることは否定出来ない。

ルール8もルール9も載っていなかったのだから。

しかしアレが相川のPDAだった場合、実は渚が想像よりも遥かに狡猾な『犯人』だということになるが…。

（普通に考えると、あり得ない……よな？）

今もルールの把握に頭を悩ませている彼女が『犯人』であるなどとは想像出来なかった。

（まあ、jackが俺のPDAでなくともJOKERの可能性もある訳だし、あんまり楽観視するのもダメだよな。やれる事はやっておかまいと…）

ゲーム開始から9時間が過ぎようとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3527o/>

シークレットゲーム ~ lost lifeline ~

2011年10月7日20時36分発行